

シンポジウム

紀ノ川北岸の 古墳文化

—初期須恵器・埴輪・陶棺からみた地域の歴史—

資料集

公益財団法人 和歌山県文化財センター

平成26(2014)年2月1日(土)

開催にあたって

紀ノ川下流域は陸路と水路が交わる要衝の地であり、古くから様々な地域の人々の交流がはかられていました。その中でも紀ノ川下流域の北岸は古墳時代の渡来文化が流入した地として知られており、車駕之古址古墳の金製勾玉や大谷古墳の馬冑、鳴滝遺跡の大型倉庫群は特に有名です。

当センターでは県道の改良及び第二阪和道路建設に先立ち、これらの遺跡が集中し、紀ノ川河口部の湊があったと考えられている付近の平野部から丘陵端部にかけて、平成10～13年度に楠見遺跡、平成24年度から平井・平井Ⅱ遺跡の発掘調査を実施してまいりました。遺跡は現在も発掘中ですが、これらの遺跡から新たにみつかった初期須恵器や埴輪、陶棺などを通して、地域の交流と発展の様子を描けたらとの思いで、シンポジウムを開催することといたしました。

古墳時代中期から後期にかけて、古代豪族の紀氏が活躍していた頃に朝鮮半島から渡ってきた焼き物作りの文化が、和歌山らしく変化していく様子を、楠見式土器や淡輪系埴輪といった地元の地名を冠した遺物から考えたいと思います。また、これまで和歌山では存在がほとんど知られていなかった陶棺や埴輪窯、新たにみつかった古墳や珍しい形象埴輪などもご紹介いたします。

このシンポジウムを通じて文化財をより身近なものと感じていただき、その大切さについて考える機会となれば幸いです。

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 工 楽 善 通

開催日程・資料集目次

公開シンポジウム

紀ノ川北岸の古墳文化 — 初期須恵器・埴輪・陶棺からみた地域の歴史 —

■ 日時

平成 26 年 2 月 1 日（土）13:00 ~ 16:35

開会挨拶 13:00 ~ 13:05

■ 記念講演

13:05 ~ 14:10 「紀伊の渡来文化 — 初期須恵器を中心に —」 1
定森秀夫（滋賀県立大学教授）

■ 発表

14:10 ~ 14:40 「平井遺跡周辺の調査成果」 13
中村淳磯（公益財団法人 和歌山県文化財センター）

（休憩）

14:50 ~ 15:20 「紀ノ川北岸の埴輪 — 淡輪系埴輪を中心に —」 21
藤藪勝則（公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団）

15:20 ~ 15:50 「和歌山県出土の陶棺」 29
川口修実（有田川町教育委員会）

■ 討論

15:50 ~ 16:30 「紀ノ川北岸の古墳文化について」
司会：丹野 拓（公益財団法人 和歌山県文化財センター）

講評・閉会挨拶 16:30 ~ 16:35

関連展示 平井遺跡・平井Ⅱ遺跡の初期須恵器・埴輪・陶棺の展示

コ ラ ム 「渡来文化の痕跡を求めて」丹野 拓 12

誌上発表 「新発見の古墳、平井 1 号墳」上地舞・田中元浩（和歌山県教育委員会） 37

資料紹介 「平井遺跡出土の埴輪たち」森原 聖（公益財団法人 和歌山県文化財センター） 40

参考資料 「平井Ⅱ遺跡の初期須恵器」 11

「紀ノ川北岸の概要 — 平井津推定地の周辺 —」 44

「平井遺跡・平井Ⅱ遺跡の発掘調査区全景」 46

編集：丹野 拓・森原 聖

会場：きのくに志学館 講義・研修室（和歌山県立図書館 2 階）和歌山市西高松一丁目 7-38

主催：公益財団法人和歌山県文化財センター

後援：和歌山県教育委員会・和歌山市教育委員会・公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団・

一般社団法人 和歌山県文化財研究会

*このシンポジウムは平成 25 年度史跡等及び埋蔵文化財公開活用事業の補助金（文化庁補助金）を受けて実施した。

紀伊の渡来文化 —初期須恵器を中心に—

定 森 秀 夫 (滋賀県立大学)

1. はじめに

紀ノ川下流域北岸に所在する楠見遺跡は、1969年の関西大学による発掘調査などで初期須恵器が確認され、初期須恵器研究および紀伊における渡来文化を考察する上で欠かせない遺跡となっている。しかし、その初期須恵器の系統や時期など、窯跡が未発見なこととも相俟って、未だに不分明な点が多い。小文では、「楠見系須恵器」と仮称して、その系統や時期などを若干検討してみることにするが、従来の研究を超える成果を得るには、やはり窯跡の発見とその調査研究が欠かせないであろう。

まず、朝鮮半島の三国時代陶質土器を概観し、西日本のいくつかの初期須恵器とも比較しながら楠見系須恵器の系統・時期を推定してみたい。

そして、紀ノ川下流域の渡来文化の系譜を、いくつかの陶質土器から考えてみるとともに、ソロバン玉形紡錘車にも言及し、渡来文化の実態の一部に触れてみたい。

最後に、朝鮮半島からの渡来のルート（同時に紀氏の朝鮮半島への往来ルートでもあったであろう）に関して若干の私見を披瀝し、紀伊における渡来文化を考える今後の参考になればと思う。

2. 朝鮮半島三国時代土器の概観

朝鮮半島三国時代の土器は陶質土器に代表される。高句麗・百済・新羅・加耶の国々で形態・文様・焼成技法などが異なるため、高句麗土器・百済土器・新羅土器・加耶土器（第1図）とも呼称されてきた。近年の調査研究の進展により、高句麗土器を除いて、百済・新羅・加耶土器は、さらに細かな地域差（第2図）が認定されている。

加耶土器に関しては、4世紀代の古式陶質土器に二大地域差（第3図）が見られる。そして、5世紀から6世紀中葉にかけては高霊タイプ・固城タイプ・咸安タイプの3類型（第4図）があり、それらの分布域が大加耶・小加耶・阿羅加耶の領域を示すと考えられている。

百済土器も河川流域ごとで異なっていることが指摘され、中でも全羅南道地域の独特の壺類などが全南系あるいは馬韓系として分離されてきている。

以上のように、陶質土器の地域差が非常に顕著であるという特色から、それが日本列島で出土した場合、朝鮮半島の特定の地域、さらには時期も限定できる可能性が極めて高いのである。

3. 楠見系須恵器の系統と時期

日本列島での一大須恵器生産地は陶邑古窯跡群であり、初期須恵器窯もまた陶邑古窯跡群に多く存在する。しかし、近年主に西日本一帯で、初期須恵器窯跡が発見され始め（第5図）、陶邑窯以外でも初期須恵器が生産されていたことが判明した。ただし、それらの窯のほとんどは短期間の操業で、陶邑窯のように継続しないことが特徴である。

和歌山市楠見遺跡から出土した須恵器の中で特徴的なのが、未貫通の菱形透孔を縦列に施した無蓋高杯（第6図1）である。この種の高杯は第3図に示した4世紀代の古式陶質土器内陸様式に見られるものに近い。このような透孔配置の高杯は、5世紀に入ると慶尚道地域ではほとんど見られなくなる。ただ、大邱新塘洞の窯跡から数量は極めて少ないが、変形した菱形様の未貫通あるいは貫通した透孔を縦列に施した高杯脚部片が、上下垂直透孔（加耶系）と上下交互透孔（新羅系）の両者とともに出土している。報告者は5世紀初ないしは前葉としている。したがって、慶尚道の一部地域ではこのような透孔が5世紀前葉まで残っている可能性がある。

韓国では、4世紀末から5世紀初にかけての陶質土器の変遷が不明な部分が多い。大邱新塘洞窯跡でみられたように加耶系と新羅系が未分化の状態も看取される時期でもある。

器台は、第6図2のような筒型器台と第6図5のような鉢型器台の2種類がみられる。後者の鉢型器台は、脚が太いことが特徴で、洛東江河口様式の系統を引いていると言えよう。内陸様式の系譜を引く鉢型器台は脚が細長いことが特徴である。また、肩部に乳頭状突起を付けた大甕（第6図6）も洛東江中流域から下流域に見られる形態である。

したがって、楠見系須恵器は系譜的には洛東江下流域から中流域にかけての陶質土器に近いといえるだろう。時期は、韓国サイドから見て5世紀初、上れば4世紀末も考慮されよう。

一方、西日本の初期須恵器窯の時期を見てみると、愛媛県の市場南組窯では高杯の形態が楠見系と全く異なるが、TK73型式まで上る可能性がある。香川県の宮山窯（第7図）では、楠見系に似た未貫通の菱形透孔を横列に施した特異な高杯があり、塩冶琢磨氏はTG232型式まで上げて考えている。

その後、陶邑で1991年に調査されたTG231・232号窯跡の内容が明らかとなり、TG232型式が設定されるに至った。第8図は窯跡出土品ではないが、鉢型器台や高杯の中に楠見系に近いものが若干認められる。図示はしていないが、窯跡出土品の中には楠見系須恵器に見られる頸部に一条の突帯が巡る壺（第6図3・4）に類似のものが存在する。このような点から、筆者は楠見系須恵器をTG232型式まで遡らせても良いのではないかと思いつけている。

4. 紀ノ川下流域の渡来文化

考古学が、渡来文化を具体的に認定する時、遺構では窮窿頂持ち送り天井（ドーム状天井）の横穴式石室、L字形カマド（オンドル状遺構）、大壁建物など、遺物では陶質土器、韓式系土器（平底鉢等、第10図10）、ミニチュア炊飯具などの存在を重視する。

ここではその中で、陶質土器ないしは須恵器の例をいくつか挙げて、その系統を認定してみたい。

第10図1～3は田屋遺跡出土の百済系杯である。2・3は自然流路から出土しているが、第9図の変遷図から類推すると5世紀後半代のようなものである。この形態の杯は、百済地域以外では出土しない。第10図7は六十谷遺跡出土の両耳付短頸壺で、蓋を伴う。これも百済地域に特有の器形である。

第10図8は、田屋遺跡出土の縄蓆文を施した壺である。最近まで加耶系ないしは百済系と認識されてきた。肩部のタタキを大きく擦消していることが特徴で、百済系とは別に、全羅南道を中心に分布することから全南系ないしは馬韓系として最近になって分離されたもの

である。

第10図4は、田屋遺跡の溝出土品で、古墳時代中期中葉とされている。全く同じ類例を韓国に求めることはできなかったが、5世紀代の咸安タイプの可能性がある。

第10図5は、田屋遺跡の住居跡から出土していて、5世紀前半の時期が与えられている。新羅系であるが、全体的な形態から洛東江下流域のものかもしれない。第10図6は、初期須恵器と思われるが、透孔を丁寧に面取りしていることから、陶質土器の可能性もあるかもしれない。

第10図9は、岩橋前山A46号墳から出土した新羅系高杯で、6世紀後半代の時期が考えられる。また、複数個体の存在は特異な例であり、そのことに関してはすでに言及したので、省きたい(定森2005)。

紀ノ川下流域の陶質土器の出土状況では、5世紀代の百済系・全南系・加耶系(咸安タイプか?)、新羅系(江東系)が多く見られるが、加耶系の高霊タイプ・固城タイプの出土例が未だにない。ただし、紀ノ川下流域から和泉山脈を越えた淡輪地域の西小山古墳から5世紀中葉の高霊タイプの長頸壺が出土していることは注意しておいてよいであろう。また、6世紀代の陶質土器が少ないことが現状では指摘できると思う。

ソロバン玉形をした紡錘車は、朝鮮半島特有の形態である。日本列島の紡錘車は、扁平か台形のものほとんどである。第11図は1999年までの出土例を集成したもので、西日本、それも北部九州、瀬戸内地域、近畿の出土例が多く、遠く飛んで福島県郡山市から出土している。和歌山県でも、田屋遺跡から1点(第11図1)出土していて、同遺跡から可能性のあるもの(第11図2)も出土している。ソロバン玉紡錘車に注目するのは、紡織が女性の仕事であれば、確実に渡来女性の存在を認定できる考古資料となるからである。すなわち、女性を含めた家族を単位とした集団の渡来を考えることができる。

5. 朝鮮半島へのルートを考える

筆者は数年前に徳島県鳴門市土佐泊所在の新羅神社を題材にして、鳴門海峡を經由した朝鮮との交通ルートを推定したことがある(定森2009)。当然、鳴門海峡の東は紀ノ川に至る。紀ノ川下流域に本拠を構えていた紀氏が、朝鮮半島へ至る航海ルートを想定したのが、第13図である。

その際、常識的には明石海峡廻りは時間的・労力的に無駄が多いはずで、鳴門海峡を通行すると考えられた。鳴門の渦潮は常時発生するわけではないので、渦潮の無い時間帯に通行するか、小鳴門海峡を通過する方法もあっただろう。

そこから、現在の香川県沿岸に点々と新羅神社や新羅明神を確認することができた。燧灘から斎灘へは恐らく来島海峡を通過したと思われる。来島海峡の南側の高縄半島および松山平野にかけては、陶質土器の出土を多く確認できる。また、渡来系の地名や神社もいくつか確認することができる。高縄半島一帯は旧越智郡であり、古代豪族の越智氏の勢力圏である。

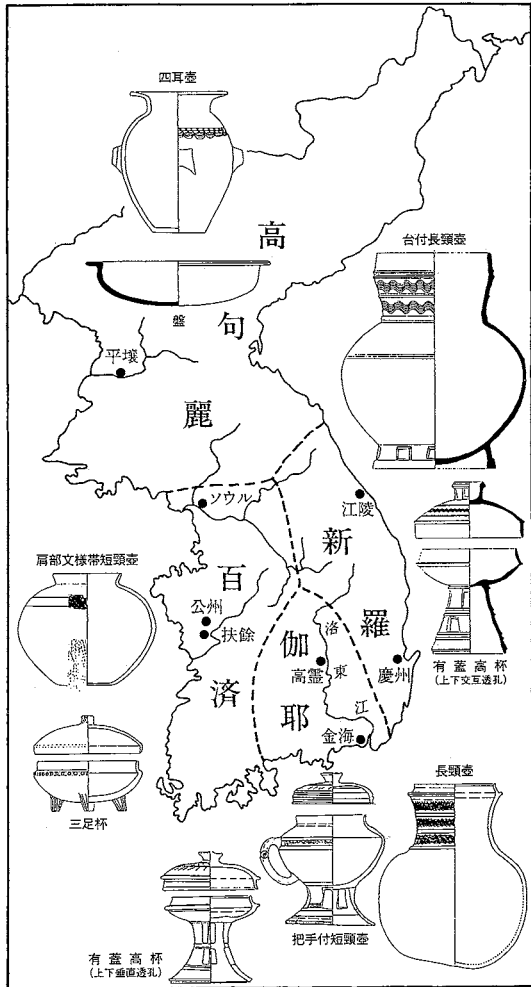
岸俊男氏は、その越智氏が紀氏の同族であることを説いている(岸1966)。筆者は、恥ずかしながらこの岸俊男氏の論文を読んではいなかった。今回小文を記すに当たって、第13図とほぼ同じ「瀬戸内海における紀氏関係要図」を作られていることを知った。筆者は、新羅神社や陶質土器という考古資料などから推定したのであるが、古代史の泰斗とほぼ一致す

る結果となった。

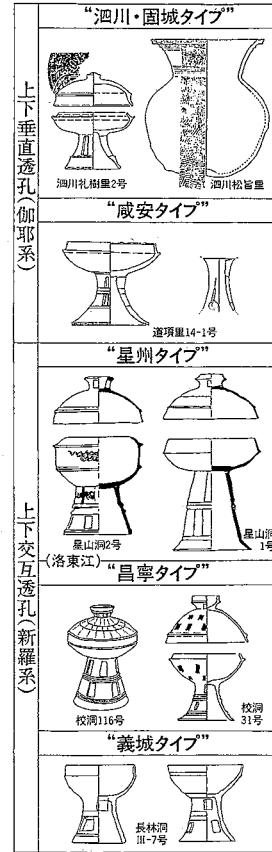
最後に、最近韓国の昌寧松峴洞7号墳から、日本の楠を使用した木棺が出土したという報道があった。筆者はまだその報告書を残念ながら見ていないが、岸俊男「紀氏に関する一試考」の中に「造船とクス」という項目が立てられていることに注目しておきたいと思う。文献史料に紀伊での造船記事は少ないようであるが、岸氏は紀伊には杉・楠が多く、当然造船を行っていたと想定している。筆者が、なぜ注意をしたのかというと、昌寧は洛東江中流域に所在し、新羅系陶質土器の分布範囲ではあるが、慶州の陶質土器とは形態の多少異なる高杯を生産していた。昌寧は、「比斯伐」の故地である。楠見系須恵器の系統が洛東江中流域から下流域にありそうだと考えると、紀伊と「比斯伐」とは何らかの関係性を有していた可能性もでてくるのであろうか。[金海鳳凰洞遺跡から2012年に出土した船の材質が楠と杉の2種と確認され、倭船の可能性があると報道（韓国聯合ニュース2014.1.08）に接した]

参考文献

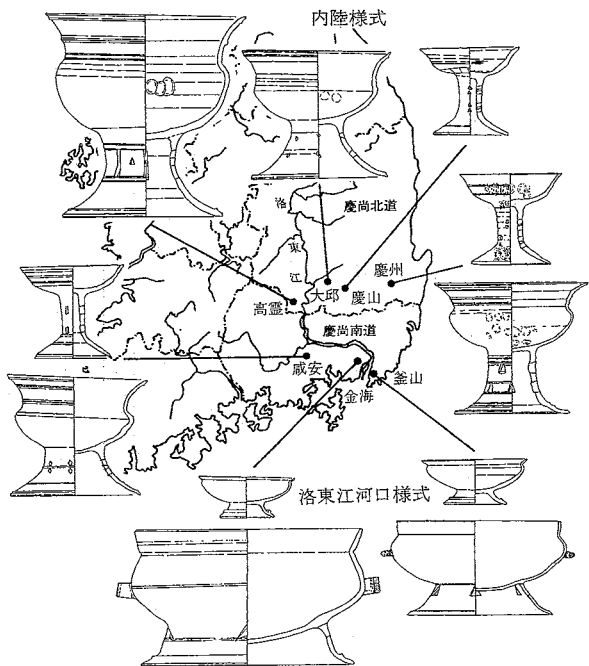
- 岸俊男 1966 「紀氏に関する一試考」『日本古代政治史研究』、塙書房
- 黒石哲夫・佐々木宏治 2006 『楠見遺跡 一都市計画道路西脇山口線改良工事に伴う発掘調査報告書一』、財団法人和歌山県文化財センター
- 定森秀夫 1992 「伽耶土器」の地域色』『緑青』No.7、マリア書房
- 定森秀夫 1994 「陶邑」成立に関する予察』『伽耶および日本の古墳出土遺物の比較研究』、国立歴史民俗博物館
- 定森秀夫 2005 「考古学からみた伽耶」『古代を考える 日本と朝鮮』、吉川弘文館
- 定森秀夫 2005 「岩橋前山 A46 号墳出土の新羅系土器」『紀伊考古学研究』第8号、紀伊考古学研究会
- 定森秀夫 2009 「鳴門市土佐泊の新羅神社」『一山典還暦記念論集 考古学と地域文化』、同刊行会
- 定森秀夫 2012 「市場南組窯と初期須恵器研究の現状」『瀬戸内海考古学研究会第2回公開大会予稿集』、瀬戸内考古学研究会
- 塩冶琢磨 2009 「宮山窯跡の再検討」『香川考古』第11号、香川考古刊行会
- 藺田香融ほか 1972 『和歌山市における古墳文化』、関西大学
- 高松俊雄ほか 1999 『清水内遺跡 一6・8・9区調査報告一』第1冊、郡山市教育委員会
- 辻川哲朗 2013 「近江における百済系土器の一様相 一草津市谷遺跡出土土器形土器について一」『紀要』第26号、公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 土井孝之ほか 1991 『西田井遺跡発掘調査報告書 一一般国道24号（和歌山バイパス）建設に伴う発掘調査報告書一』、財団法人和歌山県文化財センター
- 西田井遺跡発掘調査報告書
- 中辻慧大 2013 「瀬戸内海周辺における初期須恵器生産の導入」『海の古墳を考えるⅢ 一紀伊の古代氏族と紀淡海峡周辺地域の古墳一』、第3回海の古墳を考える会
- 山之内志郎 2004 「愛媛県における初期須恵器の一様相 一出作・市場南組窯跡型須恵器について一」『韓式系土器研究Ⅷ』、韓式系土器研究会
- 金昌億・イジェフンほか 2005 『大邱新塘洞遺蹟』、財団法人嶺南文化財研究院
- 財団法人和歌山県文化財センター 1990 『田屋遺跡発掘調査報告書 一一般国道24号（和歌山バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書一』、財団法人和歌山県文化財センター



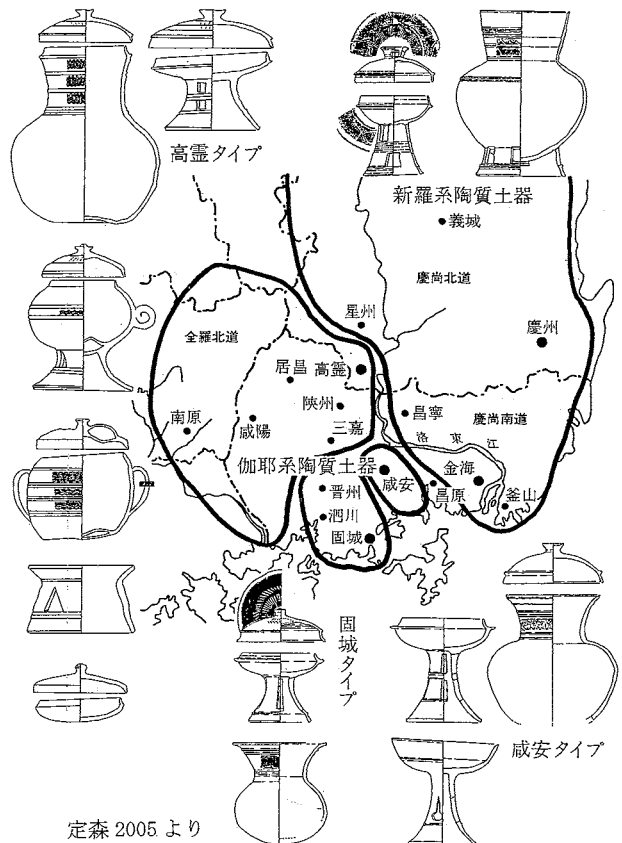
第1図 朝鮮三国時代土器の地域差(5世紀中葉) 定森 1992より



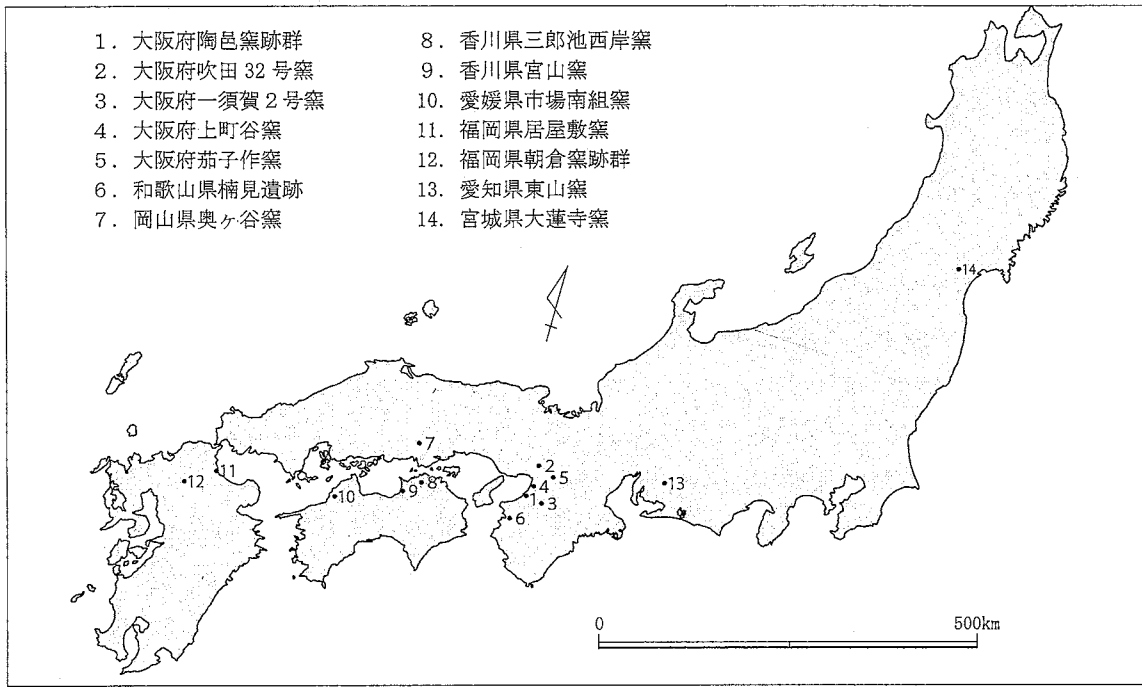
第2図 陶質土器の地域差 定森 1992より



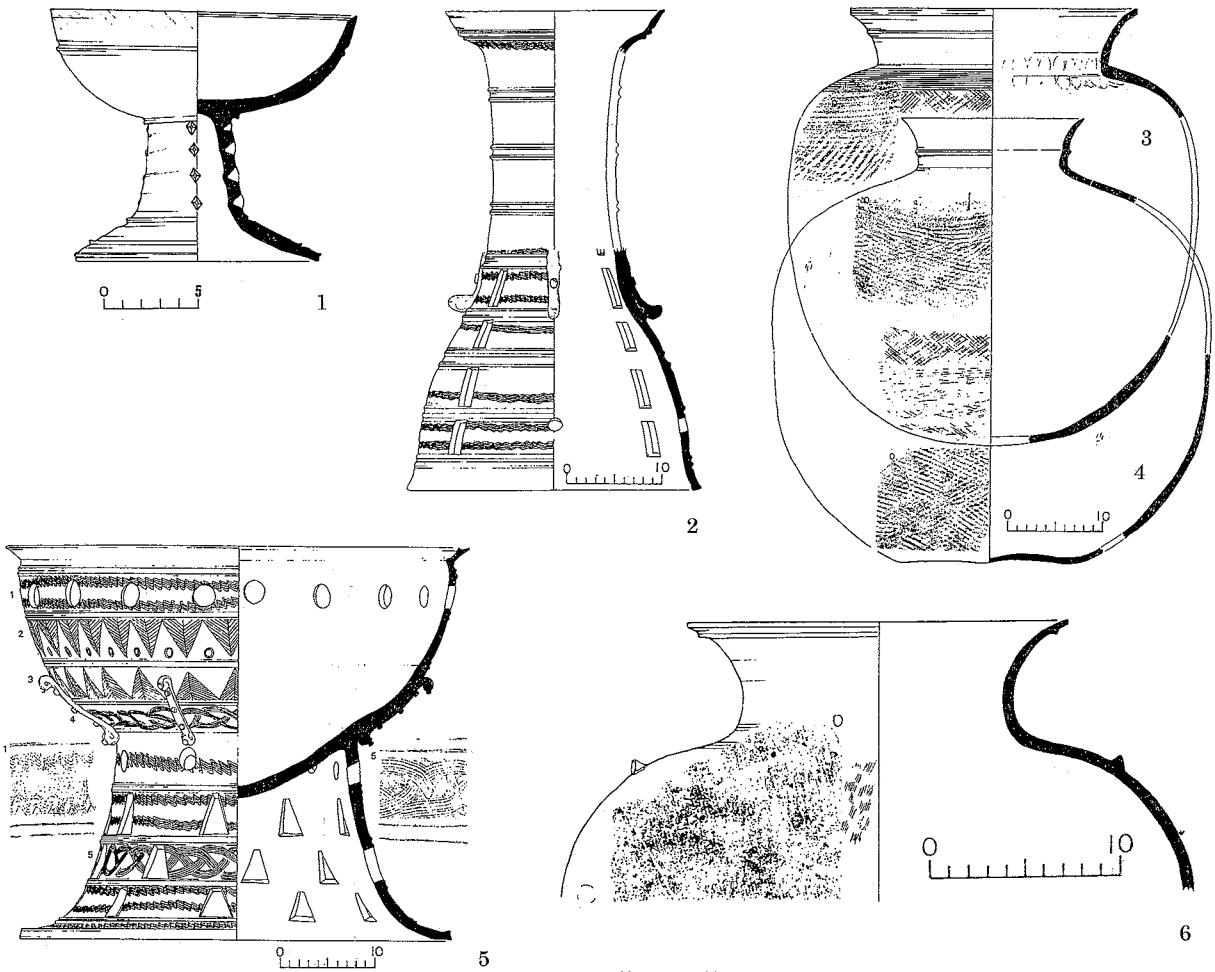
第3図 古式陶質土器の二様相(4世紀代) 定森 2005より



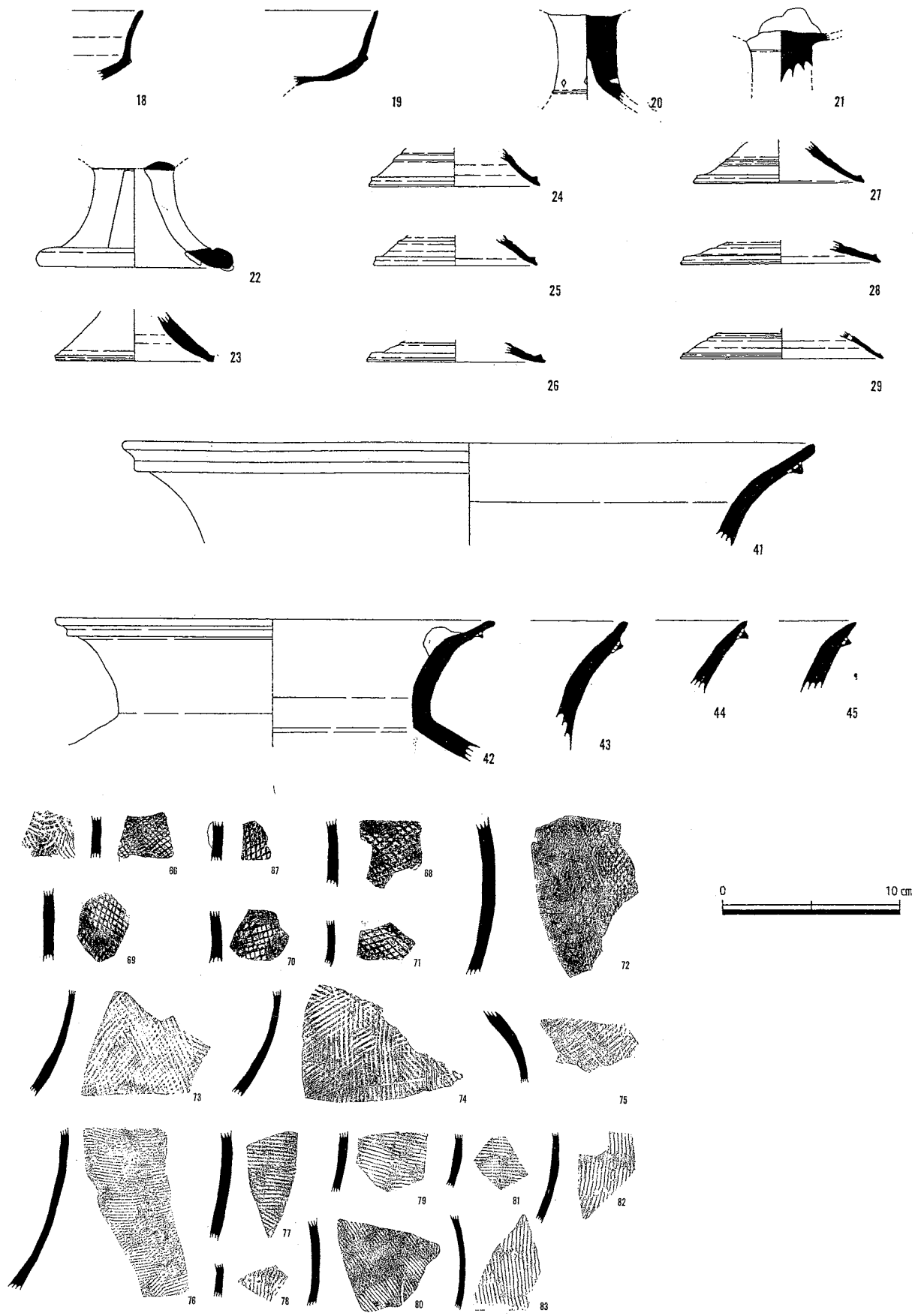
定森 2005より
第4図 伽耶系陶質土器の地域差と分布(5世紀後半代)



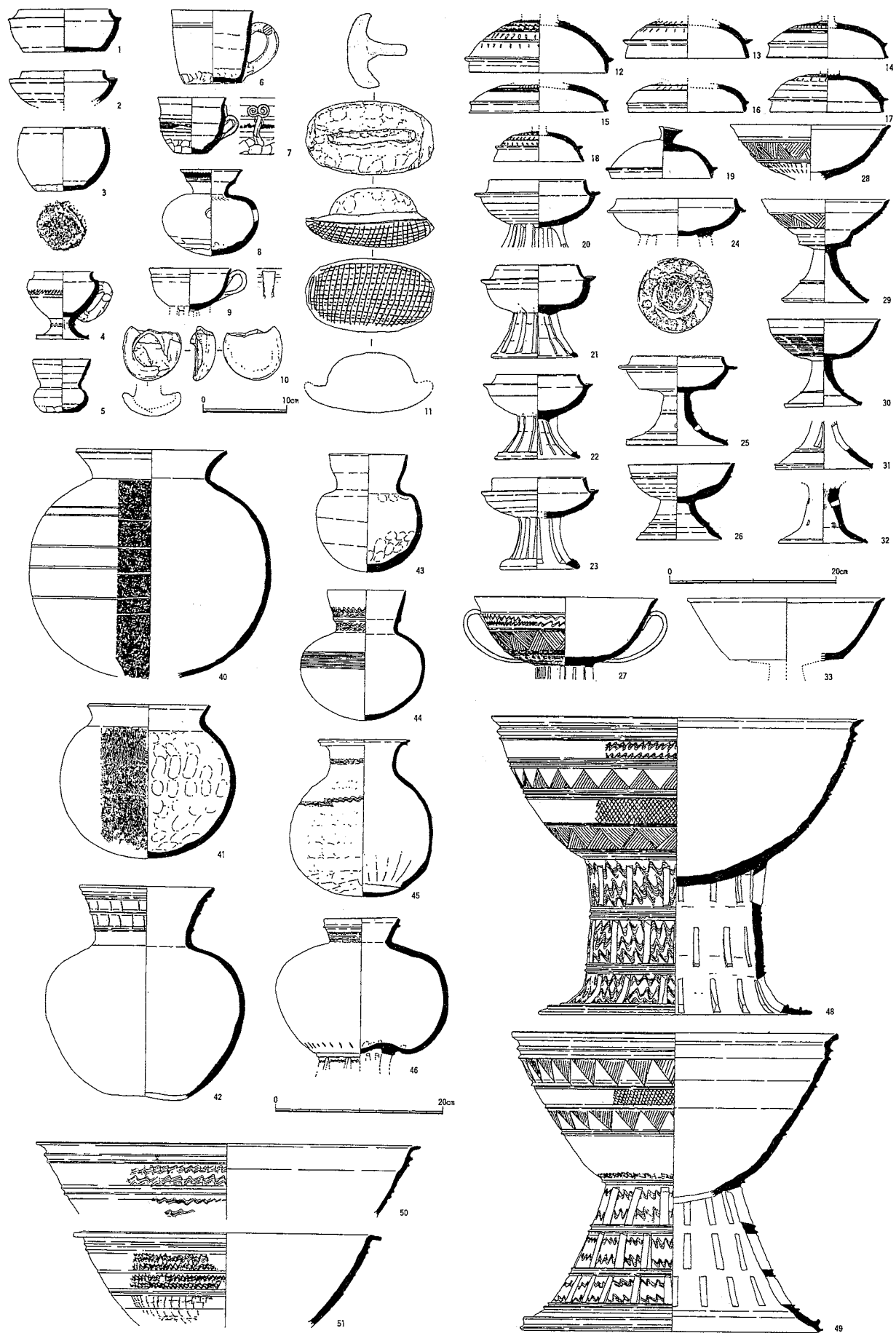
第 5 図 初期須恵器窯分布図 中辻 2013 より



第 6 図 楠見遺跡出土須恵器 菌田ほか 1972 より



第7図 香川・宮山窯跡出土須恵器 塩冶 2009 より

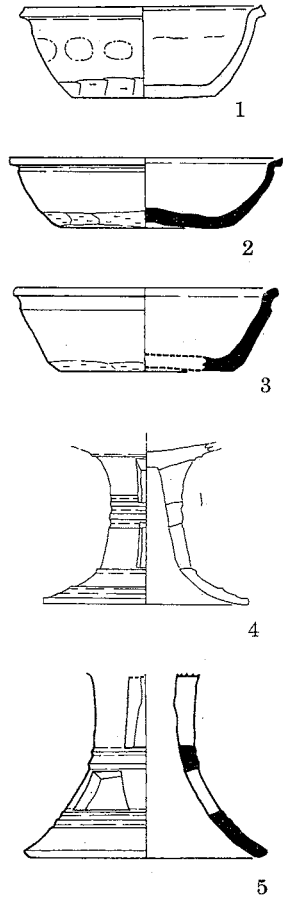


第8図 大阪・大庭寺遺跡出土須恵器 定森 1994 より

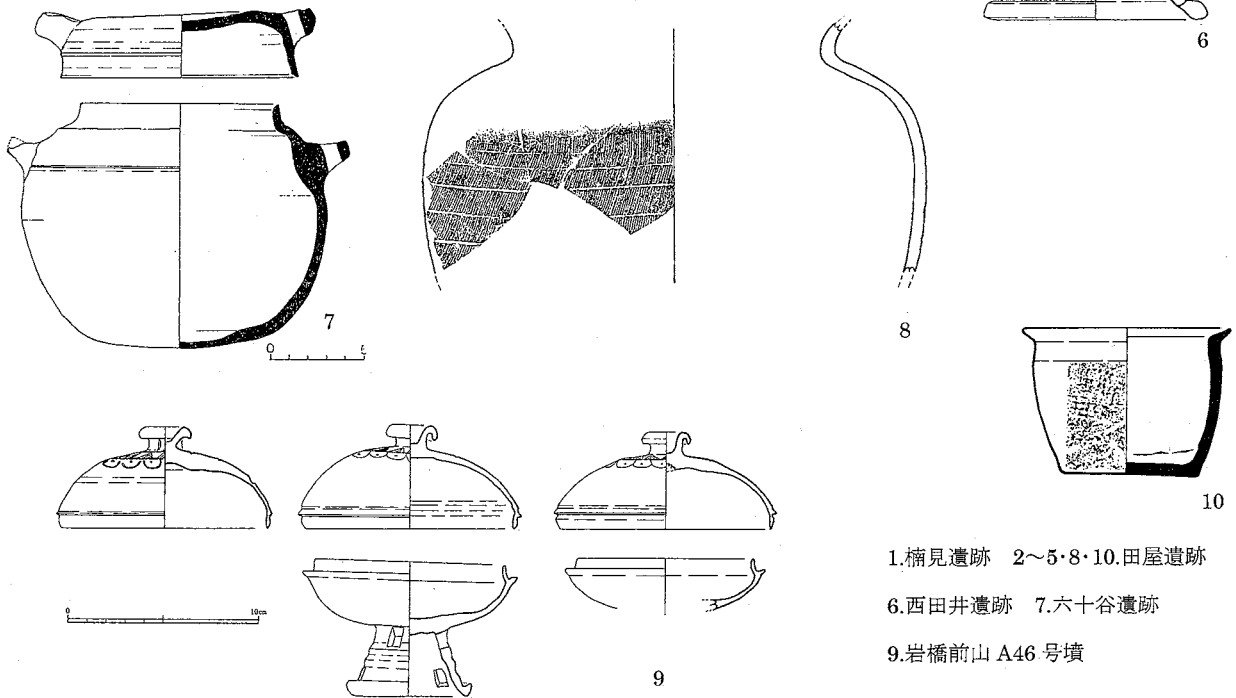
日本出土資料		馬韓・百濟出土資料	
外反口縁	直立口縁	外反口縁	直立口縁
5世紀 前半			
5世紀 中頃			
5世紀 後半			

- 1: 大阪・長原遺跡 YS92-18-SD-101
- 2: 大阪・葺屋北遺跡大溝 E090001
- 3: 大阪・陶邑伏尾遺跡包含層
- 4: 福岡・富地原森遺跡 SB-16号
- 5: 大阪・大坂城址谷地形第5b層
- 6: 兵庫・尾崎遺跡包含層
- 7・8: 千葉・大森第2遺跡 68号住居址
- 9・10: 福岡・吉武遺跡群3次調査BII区 SX-14号土坑I

- 11: ソウル漢江流域採集土器
- 12: 高興東遺跡 27号住居址
- 13: 康津楊柳洞遺跡三國時代 14号住居址
- 14: 長興枝川里遺跡ナ地区 30号堅穴
- 15: 光州東林洞遺跡 75号堅穴
- 16: 牙山葛梅里(III地区)遺跡遺物包含層 A地区
- 17: 牙山葛梅里(III地区)遺跡水路D区間
- 18: 光州東林洞遺跡 151号溝
- 19: ソウル風納土城 31号遺構
- 20: 牙山葛梅里(III地区)遺跡C地区

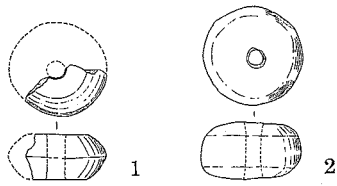


第9図 日韓の百済系杯の変遷(土田純子氏作成) 辻川 2013 より

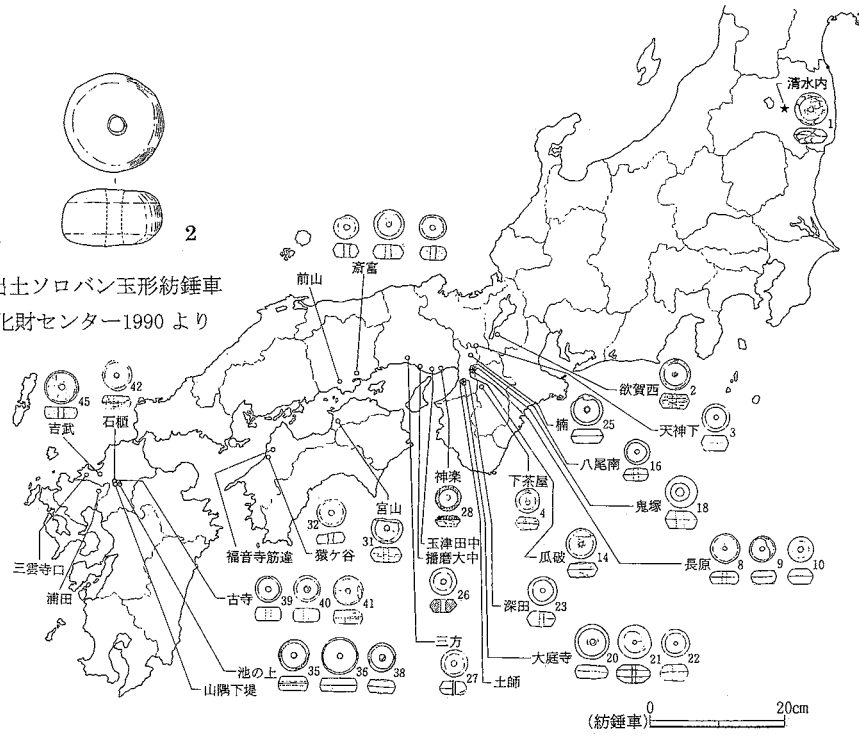


- 1. 楠見遺跡 2~5・8・10. 田屋遺跡
- 6. 西田井遺跡 7. 六十谷遺跡
- 9. 岩橋前山 A46号墳

第10図 紀ノ川下流域出土陶質土器等 黒石・佐々木 2006、財団法人和歌山県文化財センター1990、土井ほか 1991、藪田ほか 1972、定森 2005 より



第11図 田屋遺跡出土ソロバン玉形紡錘車
財団法人和歌山県文化財センター1990より
縮尺:1/4



第12図 ソロバン玉形紡錘車出土遺跡 高松1999より



第13図 朝鮮半島へのルート想定図 定森2009より

参考資料 平井Ⅱ遺跡の初期須恵器



器台脚部か



器台口縁部・底部片



紋様のある破片及び甕肩部の乳状突起か（左下）



壺甕類の体部片



高坏の坏部

渡来文化の痕跡を求めて

丹野 拓 (公益財団法人和歌山県文化財センター)

考古学ではしばしば、遺跡の新発見により、歴史が書き換えられることがある。2013年7月21日、紀ノ川北岸にも未発見の重要遺跡が残されているのではないだろうかと考えながら、ぶらっと歩いてみた。

5世紀の重要遺跡に、当時の日本列島で最大級の大型倉庫群・鳴滝遺跡(45頁07)がある。鳴滝遺跡は現在テニスコートになっているが、その東側の団地建設地には、かつて鳴滝遺跡の3～4倍にあたる開墾された平坦地があったらしい。私以外にも目を付けている人がいただろうが、残念ながらこの地点は鳴滝遺跡の調査より前に団地造成されている。遺物が表採されずに遺跡の範囲に含まれなかったのであろうが、例えば葛城氏の本拠地とみられる大和の南郷遺跡群のように、居館や高殿のような建物が存在した可能性も含めて、頭の片隅に置いておく必要があるだろう。

6世紀の重要遺跡候補地は、大谷古墳(45頁04)の西隣の山頂を歩いているときに気がついた。山頂部の二つの山が前方部を北に向ける前方後円形をしており、見かけ上では墳長60m弱の規模が予想された。そこで墳丘周辺をよく観察すると、前方部側は墳頂面と3つの側面をもち、前端部の裾に相当する場所に埴輪が落ちていた。この地点の扱いはまだ保留中であり古墳名さえもないが、私は古墳以外とは考えがたいと思っている。発見当日には、感動を分かち合うべく、近くに住む古墳研究者を呼んで再び山を登り、大谷古墳に匹敵する規模の前方後円墳として共通認識し、前方部上で紀ノ川南岸で産出し石室構築等に多用される緑色片岩の破片の散布も確認した。この古墳は、埴輪から大谷古墳の1世代後、6世紀前葉頃の首長墓とみられる。平井・平井Ⅱ遺跡(45頁01・02)を見下ろす丘陵頂部にあり(46頁参照)、大谷古墳以降の紀ノ川北岸を考える上で最も重要な遺跡であろう。多忙にかまけてそのままとなっていたが、何とかしなければと思う。



山頂の前方後円墳(破線部)

7～8世紀の重要遺跡の候補には、平安時代初頭に成立した『日本国現報善悪霊異記』の説話に登場する名草郡の大谷堂と貴志寺がある。大谷堂の候補地は和歌山市大谷、貴志寺の候補地は楠見遺跡から西へ2kmの地点にあった貴志古墳(45頁12)周辺が考えられるが、これらの寺跡は紀ノ川旧流路とともに流れ、埋まったものと推測される。紀ノ川下流域北岸に残る寺院跡では、統一新羅系や高句麗の系譜をひく軒瓦が出土している。平井津に最も近い地点に想定される大谷堂と貴志寺も、渡来系の要素の濃厚な寺院であったのではないだろうか。

考古学では基本的に発掘調査により発見した遺跡・遺物を調査対象とするが、発掘調査された遺跡は、昔、実際にあったもののごく一部にすぎないので、補足的に全体を展望しておくことも必要である。

みなさんも、山を登り、風を感じて、昔の和歌山の痕跡の上を散歩してみませんか？

平井遺跡周辺の調査成果

中 村 淳 磯 (公益財団法人和歌山県文化財センター)

1. 調査の経緯と経過

一般国道 26 号第二阪和国道の建設工事に伴い、周知の遺跡である平井遺跡の範囲外で遺物が出土したため、平成 24(2012) 年 1 月に和歌山県教育委員会により試掘確認調査 (第 1 次) がおこなわれた。この結果、平井遺跡の東側にあたる、工事範囲の北側丘陵裾部を中心とした範囲が新たに埋蔵文化財包蔵地として認定され、「平井Ⅱ遺跡」と呼称されることとなった。この平井Ⅱ遺跡については、平成 24(2012) 年 7 月～10 月に和歌山県教育委員会により、追加の試掘確認調査 (第 2 次・第 3 次) がおこなわれた。

発掘調査の対象範囲は平井遺跡と平井Ⅱ遺跡であるが、先行して平井Ⅱ遺跡に着手しており、平成 24(2012) 年 5 月～10 月に第 1 次調査、平成 24(2012) 年 12 月～平成 25(2013) 年 3 月に第 2 次調査をおこなった。平成 25(2013) 年度には、発掘調査に本格的に着手することとなり、平成 25(2013) 年 5 月～平成 26(2014) 年 3 月の予定で、平井遺跡と共に平井Ⅱ遺跡の第 3 次調査をおこなっている。さらに平井遺跡の東端部については、平成 25(2013) 年 10 月より新たに平井遺跡の第 2 次調査として発掘調査に着手している。

2. 位置と環境

平井遺跡 (399) 及び平井Ⅱ遺跡 (437) は、現在の紀ノ川河口から約 5 km 遡った右岸の丘陵裾部に位置する。遺跡周辺の地形は、和泉山脈から南に派生する丘陵地と丘陵間の谷部を南に流れる小河川により形成された扇状地及び紀ノ川の河川堆積による沖積地に分けることができる。なお、この地域では古墳時代～古代 (6～9 世紀) には、紀ノ川の流路が現在より北に及んでいたとされている。

平井遺跡周辺では、調査地北東の丘陵上に築かれた国指定史跡大谷古墳 (指 6) を含む晒山 (さらしやま) 古墳群 (62・64・65) や雨が谷古墳群 (66)、鳴滝古墳群 (71)、鳴滝遺跡 (362)、扇状地に位置する楠見遺跡 (70) などが知られており、古墳時代の遺跡が集中している。

晒山古墳群は、5 世紀前半～6 世紀前半につくられた古墳群である。丘陵先端部には、馬冑 (ばちゅう) や馬甲 (ばこう) をはじめ、朝鮮半島との深い関わりを示す遺物を出土した大谷古墳が 5 世紀後半に築造されている。雨が谷古墳群は 5 世紀後半～6 世紀前半、鳴滝古墳群は 5 世紀後半～7 世紀につくられた古墳群である。鳴滝遺跡は、鳴滝古



周辺の遺跡 (1/25,000)

墳群の北西部に位置しており、倉庫と考えられる大型掘立柱建物群が並んだ状態で検出されている。初期須恵器が多量に出土しており、時期は5世紀前半と考えられる。

楠見遺跡は、昭和44(1969)年に関西大学が発掘調査をおこない、多量の初期須恵器（陶質土器）が出土し、注目を集めた。平成10(1998)・平成11(1999)・平成13(2001)年度には、当センターが発掘調査をおこない、縄文時代晩期～弥生時代前期と鎌倉時代前期～室町時代前期の遺構が多く検出された。古墳時代の遺構密度は低いものの、初期須恵器が少量出土している。また、今回の調査地の東端から南東約100mの地点で、(財)和歌山市文化体育振興事業団が平成12(2000)年に発掘調査をおこなっており、古墳時代の遺構が検出され、初期須恵器も数点出土している。

3. 平井遺跡の調査成果

平井遺跡部分の本格的な調査は今年度から始まったもので、平成26(2014)年3月までの予定で実施しており、現在も調査中である。まだ、未調査の部分があるため不明な部分が多く、全容はわかっていないが、現在のところ、主に古墳時代・奈良時代・中世の遺構や遺物がみついている。なお、本格的な整理作業に入っていないため、記載している遺構の時期や種類、番号などは、確定したものではなく、遺構名称は仮称であることをおことわりしておく。

○古墳時代

平井遺跡で最も多くの遺構・遺物がみつかった時期で、調査区のほぼ全域から遺物が多く出土している。調査区西端部の丘陵裾部で、古墳の横穴式石室が検出されたほか、その周囲から陶棺の破片が多く出土している。一方、調査区東半部の丘陵裾部では、埴輪窯を2基確認することができた。



石室痕跡（左）および横穴式石室（右）（上が北）

横穴式石室:古墳の横穴式石室（平井2号墳）は、後世の造成により上部を大規模に削られており、底部の石が2段分ほど残っているのみである。丘陵裾部で検出されているが、墳丘や周濠まで後世に削られていることから、古墳の形状は不明である。石室は片袖式と考えられ、玄室南側の東寄りに南に向かう狭い羨道が延びる。石室のうち、玄室内部は南北方向が約1.6 m、東西方向が約1.1 mの規模である。玄室を構成する石は、切石あるいは角ばった石を組み合わせて使用しており、内部は方形を呈している。羨道は長さ約1.0 mが確認できるが、非常に狭く人の通行が困難であるため、実際に機能していたかどうかは疑問である。底には、径5～10cmの小石が敷き詰められている。

副葬品はあまりみつかっていないが、底部で須恵器杯身が2点出土したことから、7世紀中頃の時期と推定される。また、底部付近の堆積土の精査により、骨や歯の一部と考えられる破片が少量出土している。

さらに、この石室の西約12 mの位置で、石が抜き取られたと考えられる方形の石室痕跡が検出されている。この周辺で大型の角ばった石が多く散乱しているため、後世に石室ごと破壊されたものと考えられる。こちらも、墳丘や周濠まで後世の造成により削られていることから、古墳の形状は不明である。規模も形状も不明であるが、この地区に複数の古墳がつくられていたことがわかる。

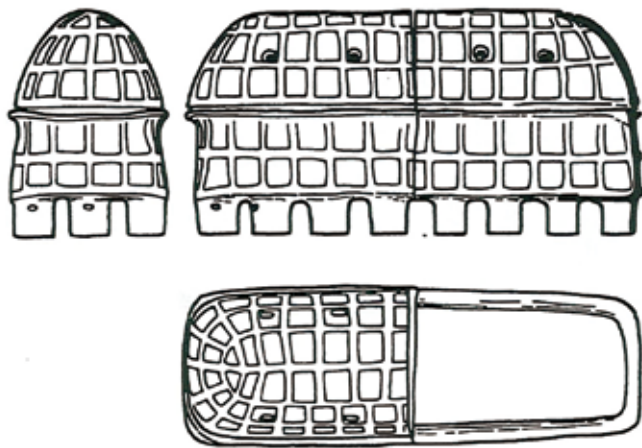
陶棺:古墳の石室が検出された周辺で、陶棺の破片が多く出土している。和歌山県内では出土例が少なく、他の例では破片数点のみや後世の遺物と共伴するものがみられるが、当遺跡では破片数が



横穴式石室出土遺物



横穴式石室（南から）



亀甲形 〔畿内型〕(奈良市歌姫・歌姫横穴)
 〔『奈良県史蹟名勝天然記念物報告』 一部改変〕

陶棺の復元図 (参考)

多く、同一個体と考えられるものもみられることから、貴重な出土例といえる。摩耗がほとんどないため、本来はこの地区にあった古墳に据えられていたものと考えられる。ただ、前記の古墳との関係は不明である。

出土した陶棺は、土師質であり、形態は亀甲形に分類されるものと考えられる。身だけではなく、蓋や脚の一部もみられ、方形透かし孔や身の接合部、赤色顔料が塗布された破片などが確認できる。現在のところ、全体を復元することはできな

いため、規模などは不明である。個々の破片の観察から、同一の個体と想定される。

陶棺は、現在の岡山県や奈良県では多くみつまっているが、他の地域ではあまり出土しないものである。このため、古墳の被葬者が、これらの地域と関係のある人物の可能性も考えられる。現在のところ、この陶棺と直接関連性の考えられる陶棺の例は確認されていない。

埴輪窯：埴輪窯は2基確認されており、1基目（西埴輪窯）は調査区東半部の西寄りの北側壁面（側溝部分）で検出された。調査区の北側側溝を掘削中に検出したものであるが、北側は約0.5 mまで確認できており、丘陵の斜面までは延びないことが判明している。また、



出土した陶棺

側溝から南側は、後世の造成によりほとんど削られているため、底部付近の被熱により焼けた痕跡が残るのみで、灰原を含めて全容は不明である。

北側壁面における観察では、検出面は地表面より約40cm下で、旧耕作土層の下面にあたり、上部は後世の削平を受けている。断面は舟底状を呈しており、残存部は、幅約1.4m、深さ約45cmを測る。西側は、被熱により硬く焼け締まっている壁面が確認できるが、東側は転用されたと考えられる埴輪片が残存しているのみである。床面はあまり明瞭ではなく、数次にわたる焼成がおこなわれた可能性は低いものといえる。内部には焼土が含まれており、多くの埴輪片が出土している。土師質の円筒埴輪が中心であるが、種類は特定できないものの形象埴輪もみられる。

確認調査においても、この地点より南東側の一段低い位置で、多くの埴輪が出土しているほか、同地区の包含層出土遺物における埴輪の比率が高い状況である。

西埴輪窯の東約24mの地点において、丘陵斜面に張り付くかたちで2基目の埴輪窯（東埴輪窯）が検出された。西埴輪窯に比べ、さらに丘陵の上まで延びており、延長は約10mが確認できた。上半分にあたる丘陵斜面部分については、上面が後世にやや削られているものの、比較的残存状況は良好であるが、丘陵裾部から下にかけては、後世に造成のためかなり上部を削られている状況である。丘陵斜面部分では、壁面と考えられる被熱により焼けた痕跡が明瞭



西埴輪窯検出状況（断面）



東埴輪窯検出状況（南から）



調査区東端部検出土坑遺物出土状況

に残存しており、幅1.0～1.2mの規模が確認できる。下部は、底部付近のみが残存している状態で、灰原部分もかなり後世の造成の影響を受けているため、全容ははっきりしない。内部には焼土や炭が多く含まれており、埴輪片も積み重なった状態で検出されている。床面も複数確認され、数次にわたって焼成されていたことがわかる。灰原から斜面の下にかけて、埴輪片の出土量は多く、土師質の円筒埴輪

だけではなく、形象埴輪も多くみられる。

今回の調査中に、調査区東端部の丘陵上（山頂部分）で前方後円墳が新たにみついている（平井1号墳）。円筒埴輪を伴っており、6世紀代と考えられる。調査区東端部では、包含層より多くの埴輪が出土しており、埴輪窯と丘陵上の古墳の両方に由来するものであると考えられるが、現在のところ、判別することはできない。また、埴輪窯の埴輪の供給先も不明である。今後の整理作業によって検討が必要な点である。

○奈良時代

調査区全域から、奈良時代を中心とする遺物が出土しているが、特に調査区東端部と西端部に集中している。遺物は後世の包含層に含まれているものが多く、遺構は調査区南東端部でまとまってピットや土坑、溝などが検出されている。この部分は、丘陵裾部にあたること



調査区中央部遺構群（南から）

や遺構の分布が南に広がる状況を示しているため、この方向に建物群が広がることが推定される。遺物は、土師器甕や須恵器杯身・杯蓋、甕、壺などで、溝や土坑からまとめて出土している。

○鎌倉時代

調査区のほぼ全域から、鎌倉時代を中心とする中世の遺物が出土している。遺構は、調査区のほぼ中央部でピットや井戸、土坑などがまとめて検出されており、復元はできないものの、建物が複数建てられていたことが想定される。井戸は、周囲に石組が施されたものや素掘りのものがみついている。いずれも内部から瓦器椀が出土しており、鎌倉時代と考えられる。このほか遺物は、土師器甕・小皿、須恵器、陶器などが主に包含層から出土している。

4. 平井Ⅱ遺跡の調査成果

平井Ⅱ遺跡部分は、平成24(2014)年度に2次にわたって東端部で調査がおこなわれ、今年度は第3次調査になる。特に、楠見遺跡の西側に隣接した位置にあたることから、古墳時代を中心として、初期須恵器などの遺物の出土が期待された。

○第1次調査

古墳時代と中世を中心とした遺構や遺物が検出された。

古墳時代では、方形の竪穴遺構が検出され、初期須恵器が多く出土した。器種は器台・高杯・壺などがみられ、器台に組紐文や竹管文などが施されていることから、楠見遺跡出土の初期須恵器と共通する部分も多い。時期は5世紀中葉と考えられるが、詳細は今後の整理作業で検討をおこなう必要がある。この竪穴遺構は全容が不明であるが、建物(住居)である可能性は低いものと考えられる。このほか、埴輪片も出土しており、6世紀前半と考えられる。

中世では、ほぼ調査区全域で遺構が検出されている。ピットや溝、土坑が検出され、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器などが出土した。瓦器椀が完形で出土したピットが2基検出され、地鎮に関連する遺構と考えられるが、



竪穴遺構遺物出土状況 (第1次調査)



土坑遺物出土状況 (第2次調査)

周辺で建物を復元することはできなかった。瓦器椀や須恵器は、12世紀前半と考えられる。

○第2次調査

第1次調査の調査区の西に位置しており、第1次調査と同様に古墳時代と中世を中心とした遺構や遺物が検出された。

古墳時代では、ピットや土坑が検出され、土坑から甕や壺と考えられる初期須恵器が出土した。初期須恵器の中には、乳状突起をもつものがみられるが、楠見遺跡や鳴滝遺跡など限られた遺跡から出土するのみで、注目すべき遺物である。古墳時代の遺物には、初期須恵器のほか、土師器や埴輪片がある。

中世では、ピットや溝、土坑が検出され、土師器や須恵器、瓦器、陶磁器などが出土した。瓦器は、第1次調査とは異なり、細片が多く、時期は13世紀中葉以降である。

○第3次調査

第2次調査の調査区の南東と北西にあたり、第1次・第2次調査と同様に古墳時代と中世を中心とした遺構や遺物が検出されている。

古墳時代では、ピットや土坑が検出されており、須恵器や土師器などが出土している。初期須恵器や埴輪の出土量は減っており、全体に遺物量は少ない。

中世では、ピットや溝、土坑、井戸などが検出され、土師器や須恵器、瓦器、陶磁器などが出土した。井戸からは、瓦器椀がほぼ完形で出土している。土坑の中には、板により方形に囲われた柵状遺構がみられ、ほぼ完形の瓦器椀が出土している。これらの瓦器椀は、13世紀代と考えられる。



平井Ⅱ遺跡調査区中央部遺構群（南東から）（第3次調査）

紀ノ川北岸の埴輪 —淡輪系埴輪を中心に—

藤 藪 勝 則 (公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団)

1. 紀ノ川下流域北岸における埴輪研究の視点

(1) 紀伊における埴輪の初現

埴輪は、弥生時代の葬制である土器供献の儀礼が古墳出現期に仮器化され、古墳の外部表飾のひとつとして発展したものである。埴輪の出現時期は各地域によって異なる。

紀伊における埴輪出現期の様相については、紀ノ川下流域南岸に築造された山崎山古墳群(5号墳)の調査から推測することができる(参①)。

山崎山古墳群は、5世紀初頭から7世紀前半まで継続的に造営された古墳群であり、古墳群築造の契機となった山崎山5号墳は、後円部に竪穴式石槨とその内部に割竹形木棺を納めた埋葬施設を構築する造り出し付きの前方後円墳である。山崎山5号墳の築造時期を示す遺物として、墓坑埋土内において故意に打ち割られ、破片が棺の長辺に合わすように細長く並べ置かれた状態で検出された朝鮮半島産の陶質土器とみられる杯身1点(第2図1)の他、墳丘から小型丸底壺や高坏などの破片が80点ほど出土している。これらの遺物によって山崎山5号墳は5世紀初頭に築造されたと考えられている。これらの土器のなかに、底部に穴を穿孔し仮器化された二重口縁壺が出土している(第2図3・4)。この二重口縁壺は、紀伊において埴輪が導入される以前の古墳における葬制を物語るものとして注目される。

紀ノ川下流域北岸では、この山崎山5号墳が築造される5世紀初頭前後に六十谷2号墳において埴輪を用いた葬制が採用されている。よって、紀ノ川下流域北岸は埴輪を古墳の外部表飾として用いる先進地であったと考えられる(第1図、表1)。

(2) 埴輪の組成と生産

埴輪の種類には、大きく円筒形埴輪(円筒・楕円筒・鱗付円筒)、朝顔形埴輪(鱗付朝顔)、壺形埴輪、形象埴輪の4種類があり、形象埴輪には器財埴輪(家・蓋・高坏・器台・船・柵・罎・盾・鞆・甲冑・軛・大刀・胡籙・双脚輪状文など)、動物埴輪(水鳥・鶏・馬・牛・猪・犬・鹿・猿・鶺鴒・飛ぶ鳥など)、人物埴輪(盾持人・武人・正装男子(女子)・巫女・力士・馬子など)がある。紀ノ川下流域北岸では、4世紀末から5世紀初頭以降に埴輪を外部表飾として用いる古墳が出現する。この時期以降の埴輪の組成は、円筒形埴輪(円筒)、朝顔形埴輪の他、形象埴輪として器財埴輪(家・蓋・罎・盾・鞆・甲冑・軛・大刀・胡籙・双脚輪状文など)、動物埴輪(水鳥・鶏・馬・牛・猪・犬・鹿・猿・鶺鴒・飛ぶ鳥など)、人物埴輪(盾持人・武人・正装男子(女子)・巫女・力士・馬子など)が主体となる。

これらのうち、今回は紀ノ川下流域北岸における古墳時代中期(5世紀)以降の埴輪を中心とし、出土資料の制約から円筒形埴輪や朝顔形埴輪の他、形象埴輪では器財埴輪の一部(家・蓋・罎・盾など)が検討の対象となる。円筒形埴輪や朝顔形埴輪は、主に古墳の輪郭に沿って樹立されるもので、機能としては古墳を区画し明示するものである。よって古墳の規模が大きくなればなるほどその使用量は膨大な量となる。

埴輪の生産は、埴輪が葬制に用いられる器物という日常生活から隔てられた特別なもので

あることから、古墳の築造を契機として集中して生産された。また、ひとつの古墳で使用される埴輪の数量は膨大な量となることから、その製作には専門の工人集団が組織された。このような埴輪生産のもつ特異性は、製作品である埴輪に当時の技術が色濃く反映されることになる。そして、その技術を詳細に分析することで、工人組織や技術系譜など組織化された人間活動を復元することができる。

紀伊における埴輪の生産地としては、紀ノ川下流域南岸の岩橋千塚古墳群が築造されている岩橋丘陵の南麓、和歌山市岡崎所在の森小手穂窯跡と同市吉礼所在の砂羅谷窯跡が知られている（参②）。ともに6世紀代の窯跡で砂羅谷窯跡は須恵器との併焼窯である。紀ノ川下流域北岸では、平井遺跡で埴輪窯跡が確認されている（参③）。

埴輪は土製品であり、その胎土には生産地近辺の粘土が使用され、混和材としての砂粒が含まれている。紀ノ川下流域で出土する埴輪胎土については、肉眼観察によって大きく2つに分類できる。ひとつは、赤色粒（クサリ礫）・黒色粒を含むもの、もうひとつは結晶片岩を含むものである。このうち、車駕之古址古墳など紀ノ川北岸出土埴輪の胎土に含まれる赤色粒・黒色粒については、紀ノ川北岸に分布する和泉砂岩が酸化焰焼成されると赤色粒となり、還元焰焼成されると黒色粒となることが明らかにされている（参④）。また森小手穂窯跡など紀ノ川南岸出土埴輪の胎土には結晶片岩が含まれている（参⑤）。よって、埴輪の胎土に結晶片岩が含まれていれば紀ノ川南岸で製作された埴輪であると考えられ、逆に結晶片岩が含まれていなければ紀ノ川北岸で製作された可能性が高いと言える。埴輪の焼成には、野焼きと窯焼成の2種がある。野焼きの埴輪は土師質に焼成され黒斑が認められるが、窯焼成の埴輪は土師質と須恵質の両者があり黒斑が認められないのが特徴である。

（3）埴輪の編年と古墳の編年

埴輪は、前述した埴輪生産がもつ特異性から、古墳の編年を組み立てるうえで欠かすことのできない資料となっている。紀伊においても例外ではなく、5世紀初頭以降の古墳の編年には埴輪の編年が参考とされる場合が多い。しかしながら埴輪は、古墳の外部表飾のひとつであり、古墳を構成する要素の一部であるに過ぎない。古墳の編年は、墳丘そのものの形態、埋葬施設の構造、副葬品や出土土器の時期など総合的な検討をもってなされるべきである。

古墳は、その墳形や埋葬施設の形態、副葬品の種類や量などから被葬者の社会的地位や地域的な繋がりを示すものとしても研究されてきた。その視点から言えば、外部表飾のひとつである埴輪も被葬者の属性を示す器物と考えられる。

2. 紀ノ川下流域北岸における埴輪の編年と動向

紀ノ川下流域から中流域にかけての埴輪編年については表1に記した（参⑥）。紀伊における埴輪の編年は、大きく3つの画期に分けることができる。Ⅰ期は紀伊における埴輪の出現と定着期であり、Ⅱ期は変革期、Ⅲ期は盛行期と言える。紀ノ川下流域北岸では、4世紀末から5世紀初頭の築造と考えられる六十谷2号墳において埴輪が出土している（第3図）。この埴輪が、現段階では紀伊における最も古い出土事例となる。

埴輪の編年には、埴輪を構成する属性の分析が必要となる。その際の指標となるのは、全体の形状、外面の調整技法と突帯の突出度及び設定位置や条数、透かし穴の形状、焼成の方法（有黒斑か無黒斑か）などである。

以下、各期の様相について円筒形埴輪を中心に述べる。

(1) 紀伊Ⅰ期の埴輪

紀伊における埴輪の出現と定着期である。前述したようにこの時期は、紀ノ川下流域南岸の山崎山5号墳において、弥生時代から続く仮器化された土器を用いた葬制が認められる時期であり、紀ノ川下流域に古墳の外部表飾として埴輪を用いた葬制が部分的に取り入れられ始めた時期である。現在、この時期の紀ノ川南岸では、埴輪を出土した古墳は確認されていない。よって紀ノ川下流域では、紀ノ川北岸が埴輪を用いた葬制について先進性をもっていた地域と言える。

六十谷2号墳では、円筒形埴輪や朝顔形埴輪の他、器財埴輪として家・盾・蓋形埴輪が出土している(第3図)。その他、破片資料となり詳細は不明であるが、晒山1号墳(第4図)や八王子山9号墳では円筒形埴輪が確認されている。またこれらの埴輪の焼成は野焼き焼成であり、黒斑が認められるものである。

(2) 紀伊Ⅱ期の埴輪

この時期は、それ以前の埴輪製作方法に大きな変化がみられる時期である。具体的には須恵器の製作技法を採用する埴輪が出現する。その要因は、紀ノ川北岸の楠見遺跡や有功遺跡、六十谷遺跡、最近では平井遺跡などにおいて、初期須恵器や朝鮮半島産の陶質土器が出土するなど、紀ノ川下流域北岸における須恵器生産の開始と密接に関わるものと考えられる。つまり、紀ノ川北岸での埴輪生産に須恵器工人が関与し始めたことを示す。この時期以降の埴輪の焼成には、窯焼成が採用され無黒斑となる。

須恵器工人が関与し製作された埴輪の特徴は、外面の調整に須恵器の技法であるタタキ技法が用いられていることがあげられる。そして全体の形状としては、底部下端に段をもつことが特徴である。この底部下端の段は、蔓などをリング状にはめた痕跡であることが実験によって明らかとされている(参⑦)。また技術的背景については、辻川氏によって埴輪製作の最終段階に回転台から埴輪を容易に切り離すための技法であることが指摘され、その系譜については朝鮮半島南部にみられる大型送風管の製作技術と共通することが確認されている(参⑧、第13図)この底部下端の段は、「淡輪技法」と呼称され、この技法を有する最も古い埴輪は大阪府岬町淡輪に所在する西陵古墳で出土している。その後、紀ノ川北岸では茶白山古墳、車駕之古址古墳、釜山古墳出土埴輪(第5～7図)にも認められ、淡輪地域の宇土墓古墳、西小山古墳でも出土するなど、泉南地域と紀ノ川下流域北岸地域との密接な繋がりを感ぜさせる。

この時期は、紀ノ川南岸においても埴輪を出土する古墳が確認され始め、紀ノ川下流域に埴輪を外部表飾として採用する古墳が定着する時期でもある。そのうち、鳴神Ⅴ遺跡や貴志川流域の罐子塚古墳からは「淡輪技法」が認められる埴輪が出土しており、北岸と南岸の技術交流を示す資料として重要である。形象埴輪については、車駕之古址古墳において器財埴輪の家・盾・蓋・囀形埴輪が、また釜山古墳から蓋形埴輪が出土している。

(3) 紀伊Ⅲ期の埴輪

この時期は、紀伊における埴輪の盛行期である。紀ノ川下流域では、大型前方後円墳から小円墳まで埴輪が樹立されるようになり、その需要が飛躍的に増大した時期でもある。円筒形埴輪においても大量生産に特化した製作技法をもつ埴輪が出現する。

紀ノ川下流域北岸では、大谷古墳出土埴輪が該当する（参⑨）。大谷古墳出土の埴輪には、その前段階に認められた「淡輪技法」が採用されていない。しかしながら、須恵器技法であるタタキを施す埴輪の存在が川西氏によって紹介されている（参⑩、第10図2）。

これらのことから、この時期に紀ノ川北岸における埴輪生産組織が再編された可能性がある。これによって、前段階の製作技術は淘汰され、新たな生産体制が構築されるものの、須恵器技法が存続していることから技術系譜としては保持されたと考えている。

また晒山7号墳出土埴輪は、2条突帯3段の円筒形埴輪である（第9図）。この2条突帯の埴輪は、埴輪の出現期である奈良県東殿塚古墳出土埴輪のなかにも認められ古くから存在する形態である。紀ノ川下流域では晒山7号墳と、南岸の花山45号墳で出土している。

この時期の後半段階における紀ノ川下流域の埴輪を用いた葬制は、紀ノ川南岸の井辺八幡山古墳や大日山35号墳から、形象埴輪として器財埴輪（家・蓋・船・盾・鞆・鞆・大刀・胡籥・双脚輪状文など）、動物埴輪（水鳥・鶏・馬・牛・猪・犬・飛ぶ鳥など）、人物埴輪（両面人物・盾持人・武人・正装男子（女子）・巫女・力士・馬子など）などが出土し、また北岸では晒山10号墳（背見山古墳）において、器財埴輪（家・鞆）、人物埴輪（男根）、動物埴輪（馬）などが出土するなど、全国的にも注目を集めるほどの盛行をみせる（参⑪、第12図）。円筒形埴輪についても鳴滝2号墳（第11図）や晒山10号墳（第12図1・2）及び雨が谷3号墳出土埴輪など、その形態に地域色とも言うべき多様性が出現する。埴輪の受容が拡大した結果引き起こされる現象とみられ、大谷古墳や晒山7号墳など前半段階にみられる埴輪との技術的な系譜関係を現在模索中である。

特に晒山10号墳出土の円筒形埴輪は、その胎土から紀ノ川北岸産とみられるもの（1）と紀ノ川南岸産（森小手穂産か？）とみられるもの（2）の2種が存在する（参⑫）。このことから、紀伊Ⅱ期以降、北岸と南岸の埴輪生産における繋がりには依然として強いと言える。さらに、平井遺跡の調査ではこの時期のものともみられる形象埴輪が出土し、埴輪窯も検出されている。紀ノ川下流域における埴輪生産の動向を探るうえで重要な発見と考える。

3. 埴輪から見えてくるもの

紀伊においては、Ⅱ期とした古墳時代中期以降に紀ノ川下流域一帯に埴輪を用いた葬制が認められるようになる。その背景には、車駕之古址古墳出土の金製勾玉、楠見遺跡や六十谷遺跡出土の初期須恵器や朝鮮半島産の陶質土器、さらに大谷古墳出土の馬冑など、当時の最先端技術である渡来系文化を保持した紀ノ川下流域北岸の果たした役割は大きく、埴輪製作への須恵器工人の起用など埴輪生産組織の構築やその技術の伝承を根付かせた。

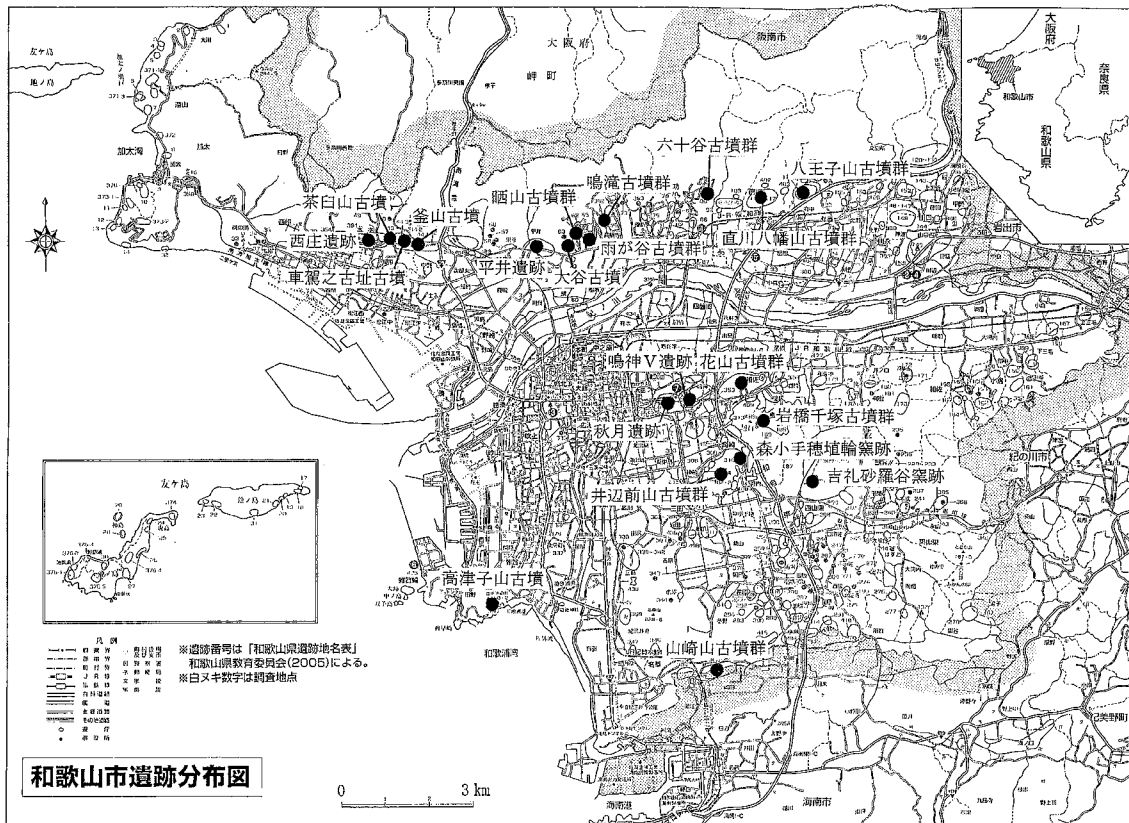
埴輪から見ると、この時期の円筒形埴輪は須恵器の技法であるタタキが注目される場所であるが、外面調整にはその他にB種ヨコハケという特徴的な調整が施されている（第5図1、第6図1）。淡輪地域の古墳や木ノ本古墳群出土埴輪では、このB種ヨコハケの使用頻度はそれほど多くないものの、当該時期に巨大な大王墓を造営した古市・百舌鳥古墳群においては頻繁に用いられた技法である。つまり、紀ノ川北岸の渡来系文化の導入には、当時の畿内王権の影響を考えずにはいられない。鳴滝遺跡において検出された倉庫群が物語るように、当時の紀ノ川下流域北岸は王権の影響力を背景とする文物の先進地ではなかったろうか。

紀ノ川下流域における埴輪の動向について述べてきた。埴輪は、古墳という墓制が被葬者

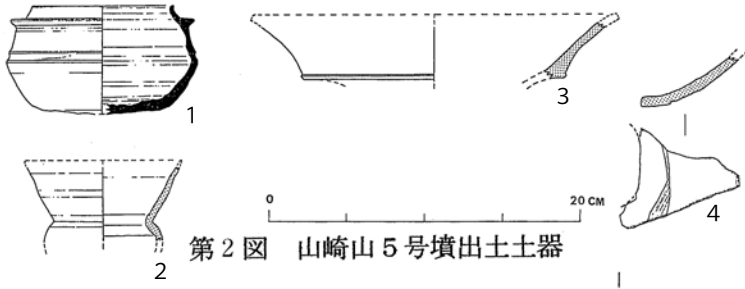
の社会的地位や繋がりを示す古墳時代において、葬制に関わる特殊な遺物であるからこそ、その技術的な系譜に地域的な結びつきを読み取り、製作技法の分析から組織化された人間集団を復元することができるものとする。

参考文献

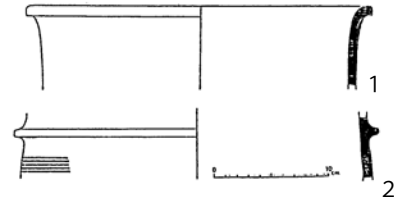
- ①和歌山県教育委員会 1978『山崎山古墳群緊急発掘調査報告書』
- ②大谷女子大資料館 1999『紀伊・砂羅之谷』
- ③公益財団法人和歌山県文化財センター 2013『平井遺跡及び平井Ⅱ遺跡の発掘調査 現地公開資料』
- ④出縄泰子 1996「埴輪・土器の胎土中に含まれる赤色粒に関する実験結果について」『紀北考古学談話会会報 No.24』
- ⑤三辻利一・富加見泰彦・前田敬彦 2013「紀ノ川流域出土埴輪の蛍光X線分析」『紀伊考古学研究 第16号』紀伊考古学研究会
- ⑥藤藪勝則 2003「紀伊における円筒形埴輪の編年」『埴輪論叢 第4号』埴輪検討会
- ⑦和歌山市教育委員会 1989『木ノ本釜山（木ノ本Ⅲ）遺跡発掘調査報告』
- ⑧辻川哲朗 2007「埴輪生産からみた須恵器工人 - 「淡輪技法」の解釈と系譜をめぐって - 」『考古学研究 第54巻第3号』
- ⑨河内一浩 2013「大谷古墳の円筒形埴輪 - 紀伊風土記の丘資料館蔵品（山口善一採集資料）から - 」『紀伊風土記の丘研究紀要 創刊号』
- ⑩川西宏幸 1977「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌 第2巻第4号』（財）大阪文化財センター
- ⑪大野嶺夫・大野左千夫 1978「背見山古墳発掘調査概要」『古代学研究 第85号』古代学研究会
- ⑫藤藪勝則 2006「古墳時代後期における円筒形埴輪の一樣相 - いわゆる紀伊型（環畿内南部型）埴輪について - 」『紀伊考古学研究 第9号』紀伊考古学研究会



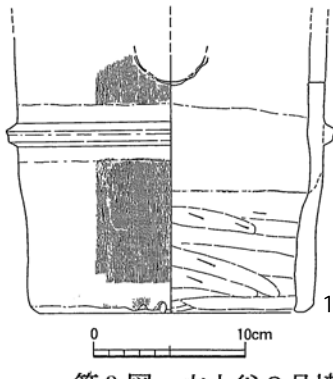
第1図 紀ノ川下流域の埴輪出土遺跡分布図



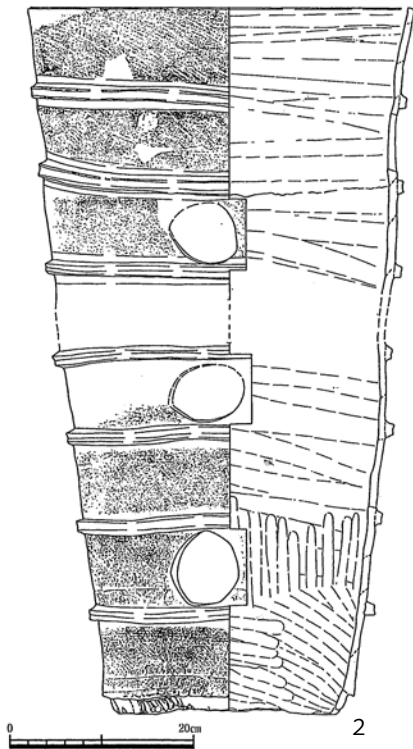
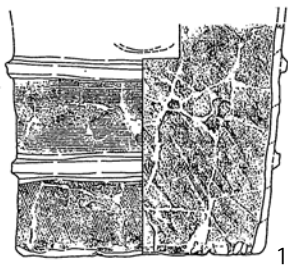
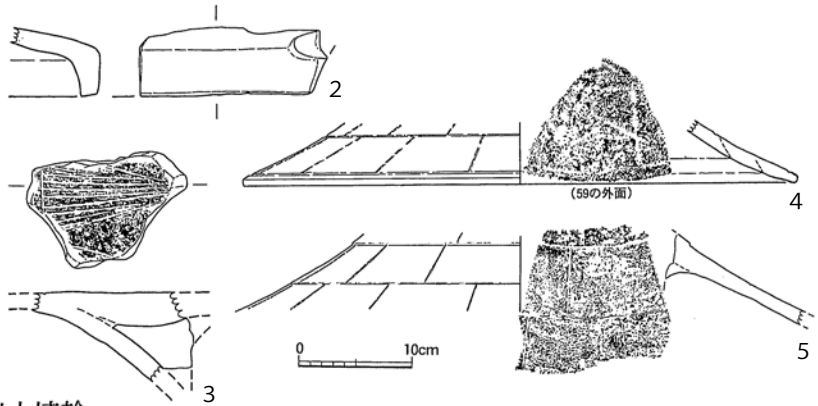
第2図 山崎山5号墳出土土器



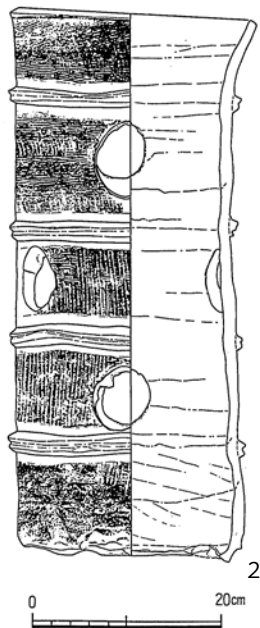
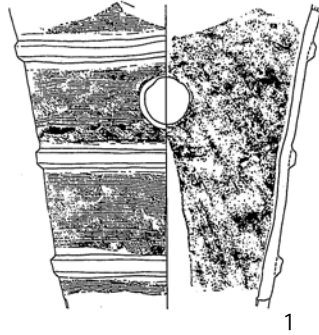
第4図 晒山1号墳出土埴輪



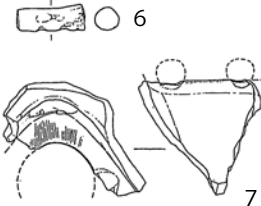
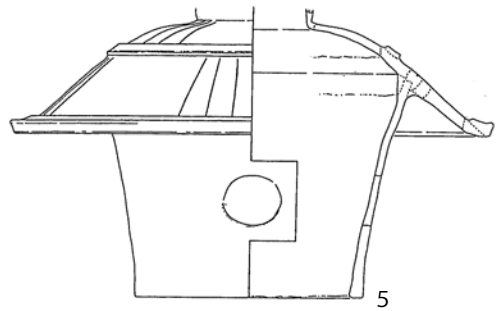
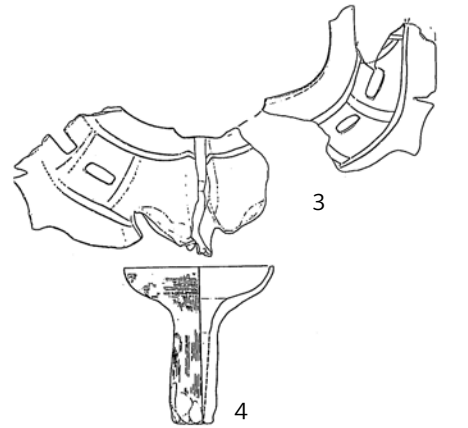
第3図 六十谷2号墳出土埴輪

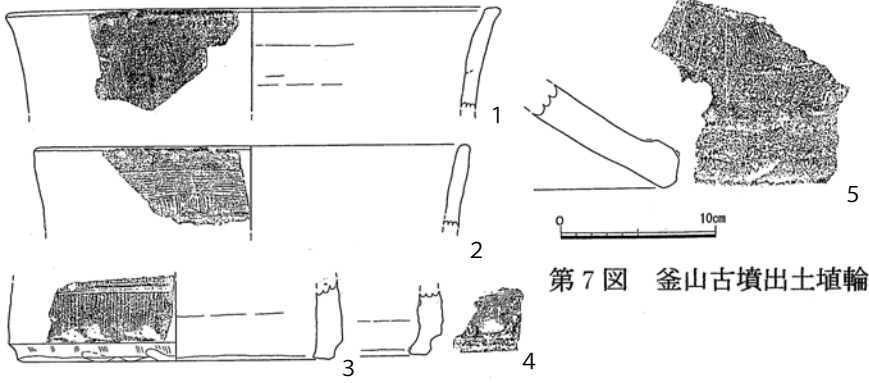


第5図 茶臼山古墳出土埴輪

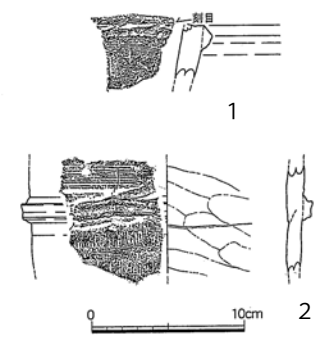


第6図 車駕之古址古墳出土埴輪

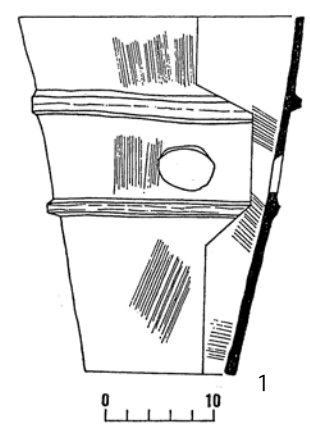




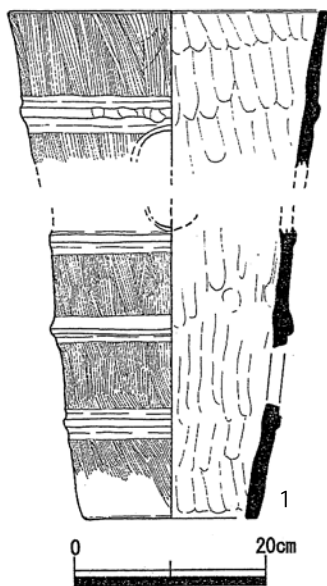
第7図 釜山古墳出土埴輪



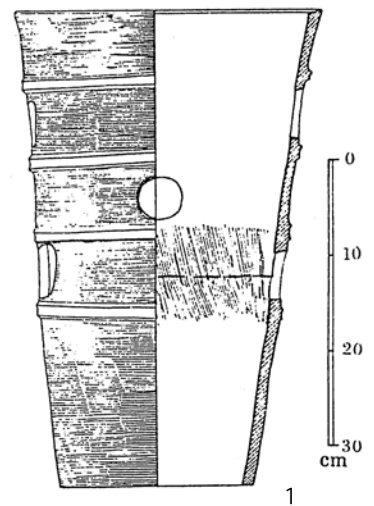
第8図 西庄遺跡出土埴輪



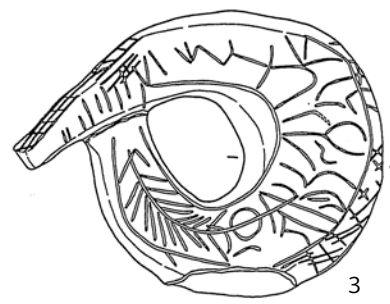
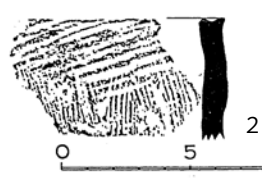
第9図 晒山7号墳出土埴輪



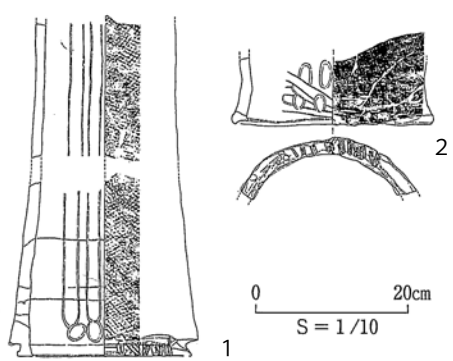
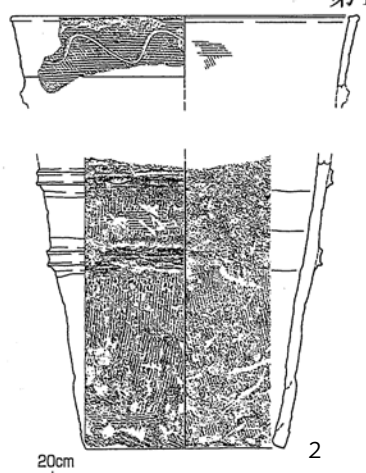
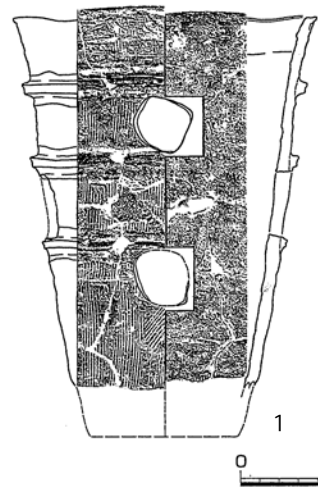
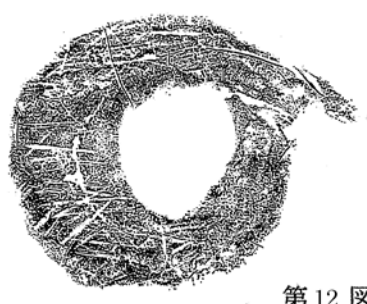
第10図 大谷古墳出土埴輪



第11図 鳴滝2号墳出土埴輪



第12図 晒山10号墳出土埴輪



第13図 朝鮮半島出土大型送風管

表1 紀ノ川流域・泉南地域の円筒形埴輪編年表

川西	埴輪検討会		紀伊編年	泉南地域 (岬町周辺)	紀ノ川下流域		紀ノ川中流域	貴志川流域	百舌鳥	古市	埴輪検討会編年の指標
	期	段階			北岸	南岸					
II	III	1	1		六十谷2号				乳岡	津堂城山	B種ヨコハケの出現 突帯間隔の縮小顕在化
		2	2		八王子山9号・ 直川8号 晒山1号	(山崎山5号墳)			ミサンザイ 大塚山	仲津山	B種ヨコハケの普及 Bb種ヨコハケの顕在化
IV	IV	1	1	西陵		高津子山古墳			イタスケ 御廟山	墓山 誉田御廟山	Bc種ヨコハケの出現 製作技法の規格化開始
		2	2	宇土墓・ 西小山	茶白山 車駕之古址 釜山古墳	花山2号 鳴神V遺跡・秋 月遺跡			大仙 田出井山	黒姫山	Bc種ヨコハケの普及
		3	3		西庄遺跡				土師ニサンザイ	軽里大塚 市野山	Bd種ヨコハケの顕在化
V	V	1	1		大谷・晒山7号	花山45号			竜佐山 一本松	岡ミサンザイ 白髭山	V群系の出現
		2	2		鳴滝2号 晒山10号	花山6号 大谷山22号 大日山35号・ 井辺八幡山	北田井1号	三味塚	平井塚・榎北	ボケ山	断続ナテ技法Bの出現
		3	3		雨が谷3号	大日山43号・ 井辺前山32号		平池1号			
		4	4				船戸箱山古墳		日置荘西町窯	河内大塚	日置荘窯系の出現

※藤藪(2003)に加筆修正

和歌山県出土の陶棺

川口 修実 (有田川町教育委員会)

1. はじめに

陶棺とは、古墳時代に製作された土製の棺のうち、古墳時代後期に登場した底部に円筒形の脚をもつ棺の総称である(図1)。陶棺は、古墳時代後期後半から飛鳥時代にかけて使用されたが、岡山県内では小型化しながら火葬骨を納める骨蔵器へと転化し、一部は奈良時代においても使用された。

陶棺は、東は福島県から西は佐賀県まで分布しており、全国で約800例が発見されているが(津山市郷土博物館2013)、その出土数は岡山県が総数の約70%を占めており、特に東半部の備前や美作地方に集中して出土している(図2左)。次に発見例が多いのが近畿地方であり、総数の約22%を占めるが、その出土地は奈良県北部、京都府南部、大阪府といった近畿地方中央部に集中している(図2右)。陶棺は、その分布が岡山県や近畿地方中央部に強く偏在する極めて特徴的な遺物である。

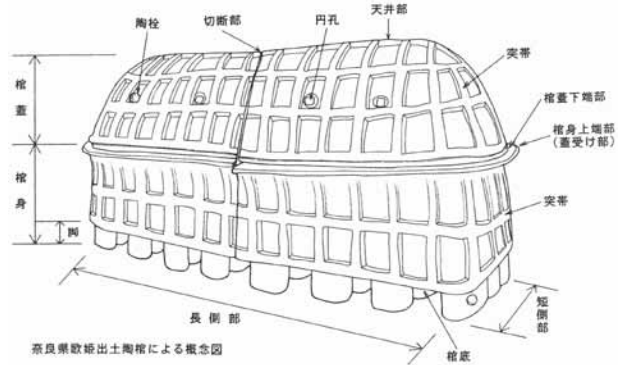


図1 陶棺の部位名称 (白石他 1992 より)

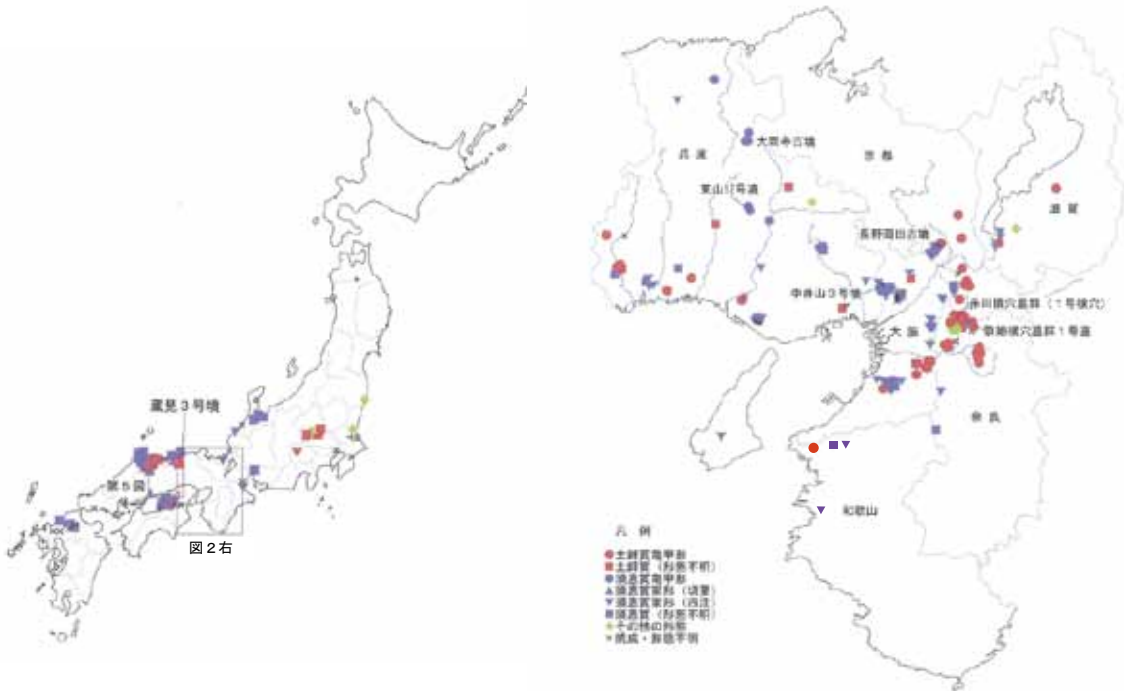


図2 陶棺分布図 (津山市郷土博物館 2013 に和歌山県出土例を追加)

陶棺は、焼成の違いから大きく土師質と須恵質のものに区分され、またその形態から亀甲形と家形（四注式・切妻式）に分類される（図3・4）。家形陶棺のうち、四注式は近畿地方での出土が多く、岡山県内での出土は少ないが、切妻式はそのほとんどが岡山県内での出土である。

また、地域によって出土する陶棺の種類や形態は異なっており、岡山県内でも美作地域では土師質亀甲形陶棺が圧倒的に多いが、備前南部では須恵質陶棺が多く出土している。近畿地方においても、奈良県内では圧倒的に土師質亀甲形陶棺が多いが、摂津地域では須恵質陶棺が圧倒する。

陶棺は同じ土師質亀甲形陶棺や須恵質四注式陶棺でも、近畿地方出土例（畿内型）と岡山県出土例（岡山型）では、その形態や製作技法などに差異があり（図5）、畿内型についても地域によって差があることが知られている。

陶棺は、これまでの研究によって、6世紀中葉に河内地方において土師質亀甲形陶棺が出現し、奈良県北部や岡山県に伝播したものと考えられる。須恵器の技法で製作された須恵質陶棺は、土師質亀甲形陶棺の影響を受けて、7世紀を前後する時期に須恵質の亀甲形陶棺が出現し、ほどなくして須恵質家形陶棺が出現すると考えられている。その後、須恵質家形陶棺は、近畿地方では7世紀中葉にかけて使用された。

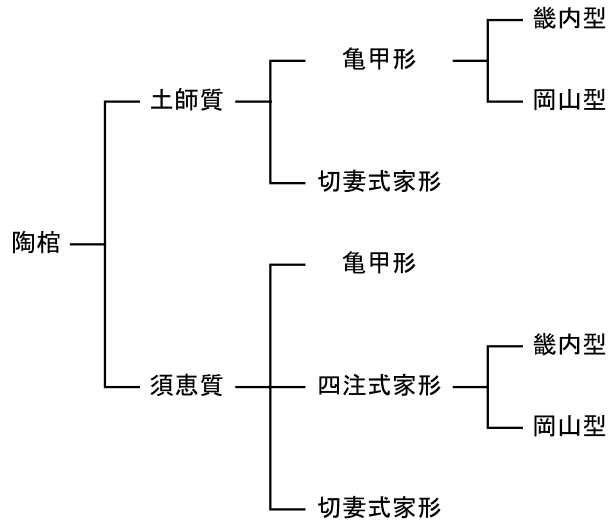


図3 陶棺の分類

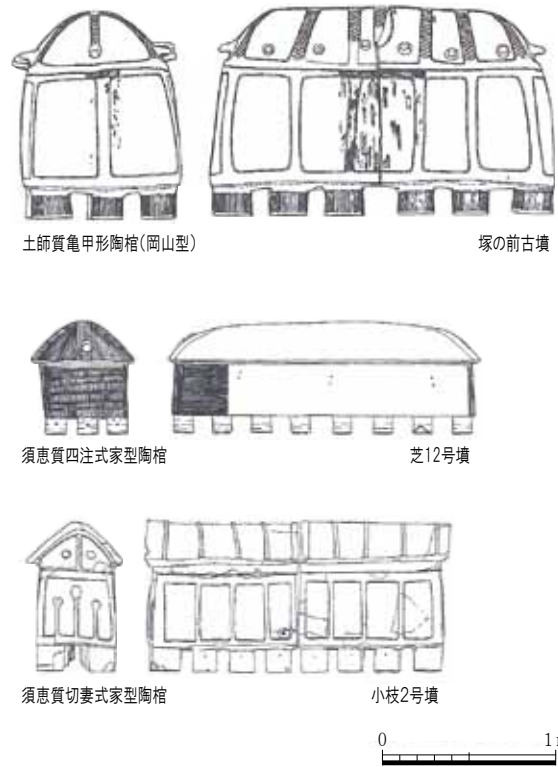


図4 陶棺の型式

		蓋と身の高さ	突帯の形態、段数	蓋と身の合わせ部	その他
土師質亀甲型	畿内型	高さは同程度	幅狭く、区画は1～3段	身に鏝状の受け部（別作り）	蓋に円形・方形の孔
	岡山型	身の方が高い	幅広く、区画は原則1段	合わせ部分が平坦（一体作り）	突起をもつ

		蓋と身の作り方	突帯の表現	蓋の棟表現	その他
須恵質四注型	畿内型	二分割作りではない	施さない	曲線や平坦面による表現	蓋に円孔、栓を作る
	岡山型	二分割作り	僅かな表現	明瞭な表現を行う	

図5 畿内型陶棺と岡山型陶棺の形態的特徴

2. 和歌山県内出土の陶棺

和歌山県内では、平井遺跡出土事例を含め4例の陶棺が発見されている。

岩出市 根来寺坊院跡（財）和歌山県文化財センター 1997）

陶棺の出土地は、根来寺坊院跡の南西部、大門の西約800メートルに位置し、「西山城」の山裾に巡らされた堀に隣接する谷状地形の堆積層から、古墳時代末から奈良・平安時代の遺物とともに出土している。出土した須恵器には、焼け歪みのあるものや溶着した須恵器が多いこと、窯体の一部が出土していることから、付近に窯跡が存在した可能性が指摘されている。

出土陶棺のうち、棺蓋（1）は下端部内側に突帯を設けて受け部を作り出し、棺身（2）も上端に突帯を貼り付けて凹みを作り、蓋受けとしている。この形態は、須恵質家形陶棺にみられる一般的な形態である。3は、棺身の底部とみられる破片であるが、焼成は軟質で灰色を呈し、3と同一個体とみられる棺蓋及び蓋の円形栓とみられるものが出土している（写真1）。4は、陶棺の棺身とみられる個体であるが、口縁端部から底部までは17cmと小さく（写真2）、近畿地方では類例は少ないが、小型の陶棺である可能性が考えられ、出土地周辺においては、複数の陶棺を焼成していた生産地の存在が想定される。

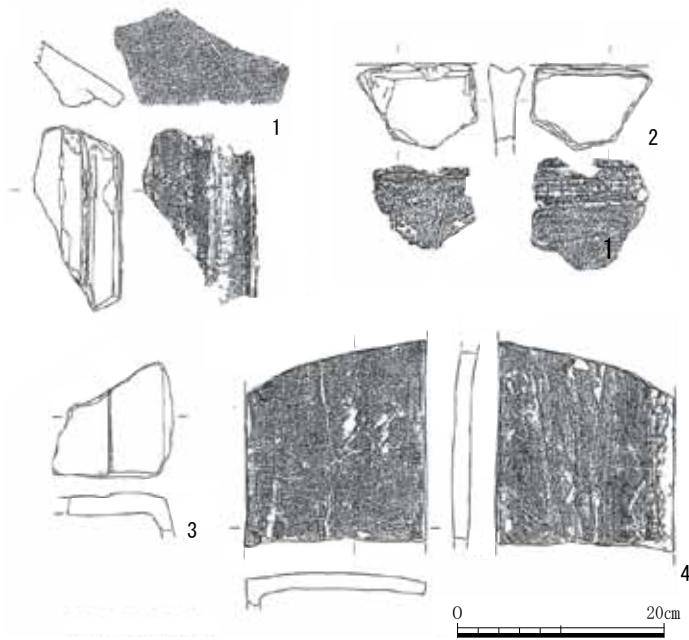


図6 根来寺坊院跡出土陶棺実測図（S=1/6）



写真1 根来寺坊院跡出土陶棺（1）



写真2 根来寺坊院跡出土陶棺（2）

有田川町 藤並地区遺跡（財）和歌山県文化財センター 1995、有田川町遺跡調査会 2008）

藤並地区遺跡は、旧石器時代から中世にかけての複合遺跡であり、飛鳥時代から平安時代にかけての瓦や須恵器を焼成した窯跡が数多く存在している。陶棺は、平安時代の溝や中世の水田、遺物包含層から破片で約 40 点が出土している。陶棺が出土する地点は、狭い範囲で出土するのではなく、200 m 以上も離れた地点で出土しており、かなり広範囲に散在して出土していることが特徴である。

棺蓋（1～3）は比較的薄手で、円形の孔が穿たれており、ここにはめ込むための円形栓（4）も出土している。棺身の破片のうち、5～8 は上端に突帯を貼り付けて僅かな凹みを作り出し、蓋受けとしている。表面には、ハケ目の痕跡を明瞭に留める個体が多い（写真 3・図 7）。10～13 は、内面の底部に布目の痕跡が確認でき、布を敷いた上に底部を構成する粘土板を載せ、脚部を接着させるという製作過程が復元できる。その特徴から瓦製作工人との関連を指摘する考えもある（河内 1995）。脚部は、その多くが剥離しているが、直径 10cm 程度と小さなものである。



写真 3 藤並地区遺跡出土陶棺

藤並地区遺跡出土の陶棺は、四注式家形陶棺とみられ、器壁が薄手であること、脚も小規模なものであることから、比較的小型の陶棺とみられる。

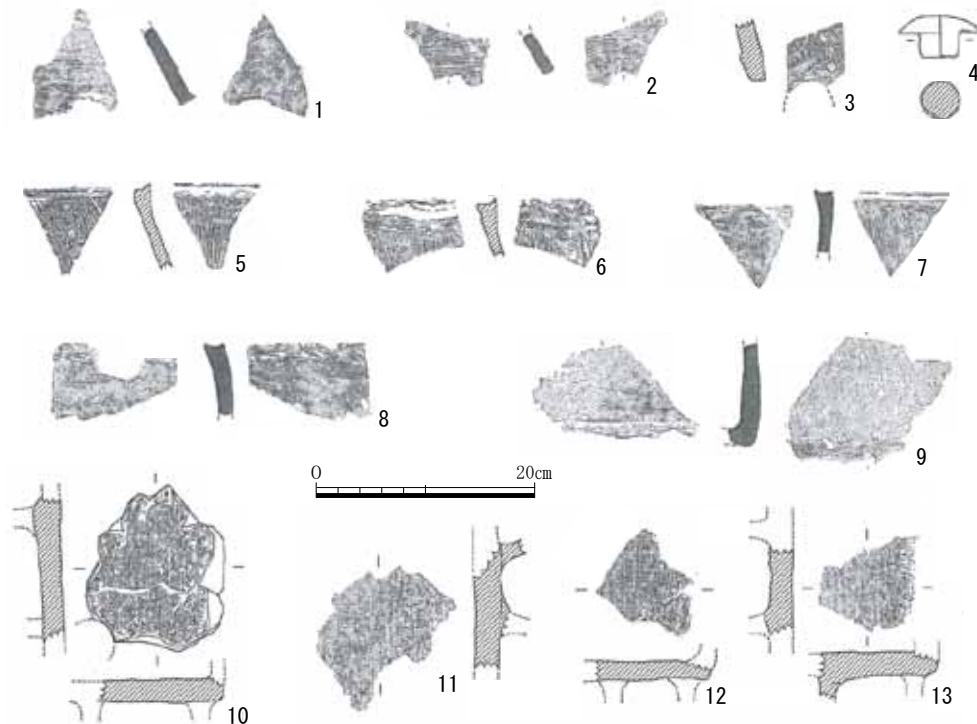


図 7 藤並地区遺跡出土陶棺実測図（S=1/6）

参考資料 和歌山市 伝上野廃寺出土陶棺（紀伊風土記の丘所蔵資料）

上野廃寺は、左右に塔をもつ薬師寺式の伽藍配置をもつ白鳳時代の寺院跡である。出土遺物の中には、他に類例のない忍冬文をレリーフにした隅木蓋瓦が特筆され、紀ノ川中・下流域を代表する白鳳寺院として国指定史跡に指定されている。

陶棺は、発掘調査による出土品ではなく、伝上野廃寺出土品として瓦類とともに和歌山県立紀伊風土記の丘へ寄贈されたものである。このため、上野廃寺出土かどうかは判然としなないが、参考資料として紹介を行う。

陶棺は、棺蓋と棺身の比較的大きな破片が各1点あり、焼成は比較的良好である。棺蓋は、外面に突帯を貼り付けて底部分を表現しているが、通例よりも上部に貼り付けられている点特徴的である（写真4・5）。また、接合痕跡から10cm程度の粘土板を積み上げて製作されたことが分る（写真6）。

棺身は、ナデ調整で仕上げられるが、ナデ残された当て具の痕跡が僅かに残り、内底面にはハケ目の痕跡が明瞭に残る（写真8）。底面の脚部は全て剥離しているが、割付線とも考えられる直線が4条残る（写真7）。また、陶棺の脚部は、直径10cmと小型であり、3列分が遺存するが、接着しては剥がした痕跡が残っている。また、脚部同士が接するように貼り付けられていることが特徴である。3列と仮定すると、棺身の幅は35～40cm程度に復元される。通常陶棺の脚部同士は接することはなく、その接着は極めて粗雑であり、未製品であった可能性も考えられる。



写真4 棺蓋底部



写真5 棺蓋外面



写真6 棺蓋内面



写真7 棺身底面



写真8 棺身内面

3. 平井遺跡出土の陶棺

陶棺は、横穴式石室周辺から比較的まとまった形で出土している。出土陶棺は同一個体とみられ、その形態から土師質亀甲形と判断される。突帯は、2cm弱とやや幅の狭いものであるが、立ち上がりが明瞭な台形を呈し、多条で格子状をなす。特に棺蓋の破片には、区画の細かな突帯をもつものが散見されることから、蓋の格子状区画の段数は3段であったと想定される(写真9)。また、棺蓋には、その痕跡から方形孔があげられていたと判断される(写真10)。近畿地方出土の土師質亀甲形陶棺は、棺身の蓋受けが肥厚したり、庇状に大きく拡張することが一般的であるが、平井遺跡では肥厚・拡張が顕著ではなく、既往の出土例にはない特徴である。

また、一部の破片には、「U」字状の貼り付け突帯をもつものや、剥離した突帯があることから、ごく限られた部位に波状突帯が施されていた可能性が考えられる(写真14)。この他、破片の中には、部分的に赤色顔料を塗布していた可能性が考えられる個体が存在する(写真16)。



写真9 平井遺跡出土陶棺 (確認調査出土)



写真10 棺蓋の方形孔



写真11 棺身



写真12 棺身



写真13 脚部



写真14 波状突帯



写真15 棺蓋



写真16 赤色顔料が塗布された棺蓋

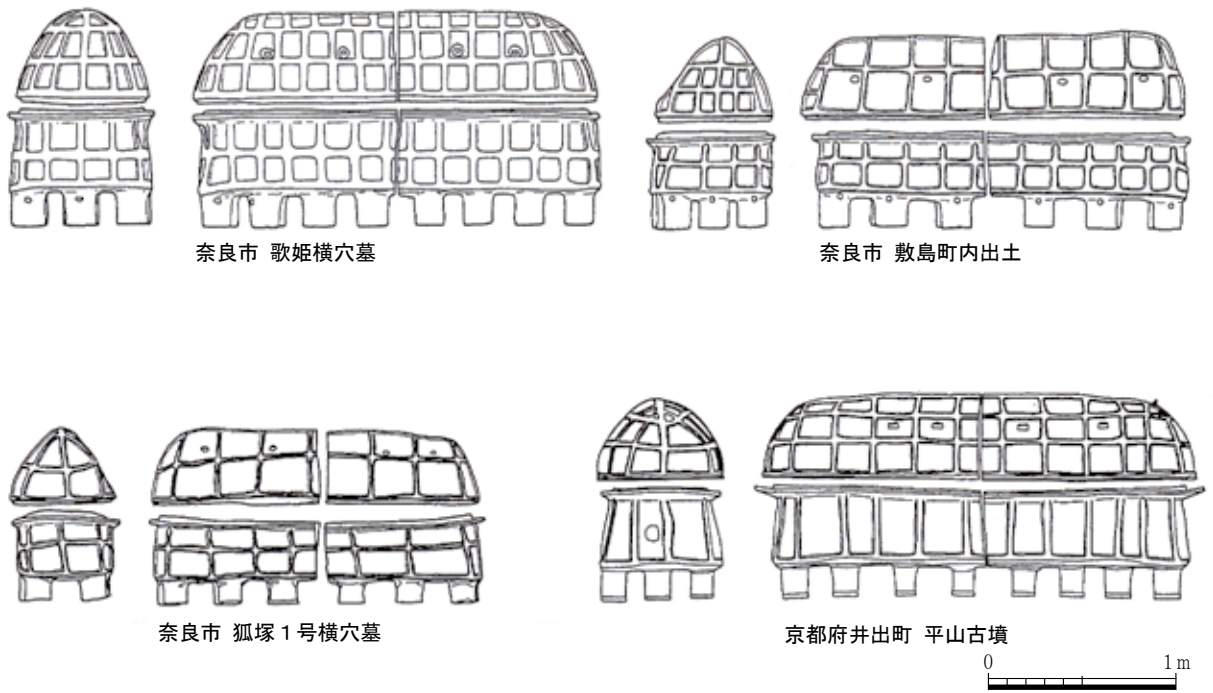


図8 平井遺跡出土陶棺の類例 (S=1/40)

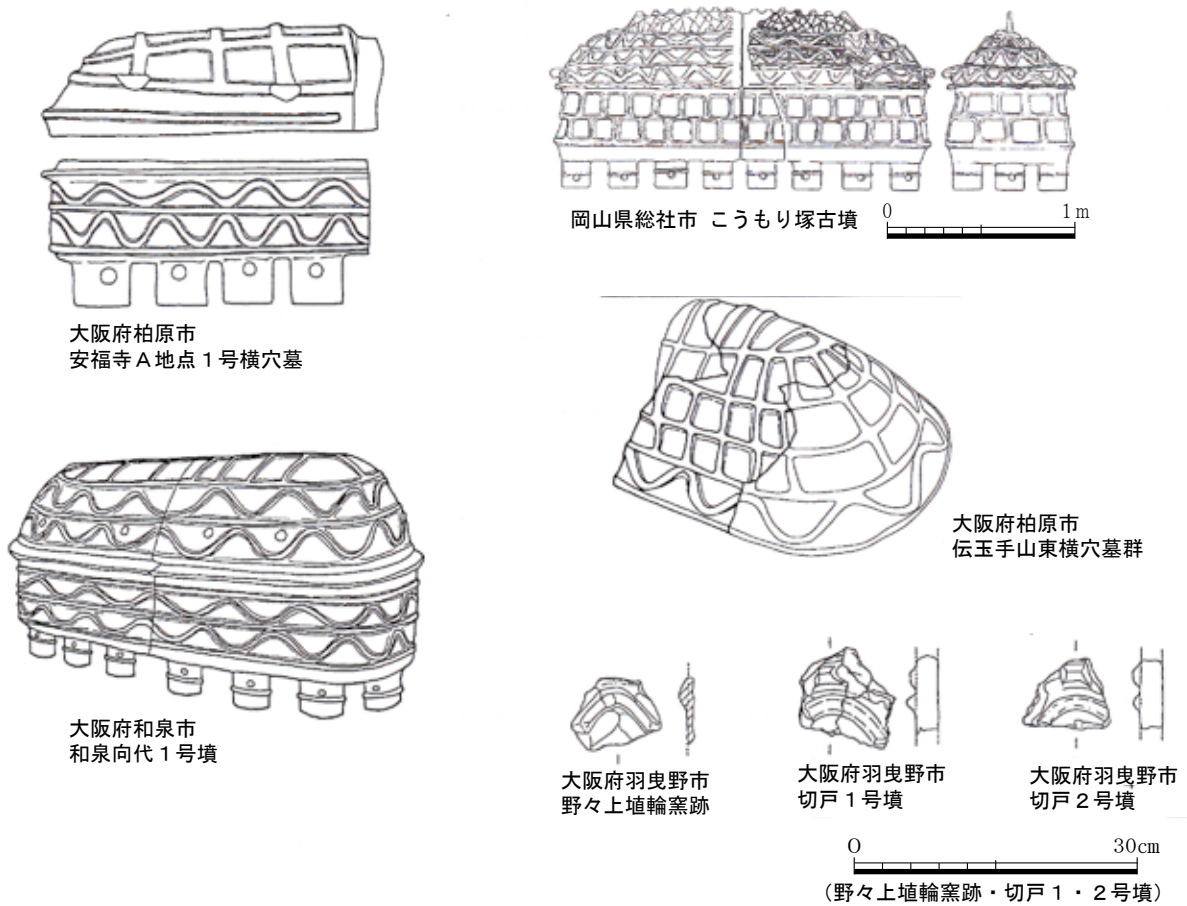


図9 波状突帯を有する陶棺の類例

4. おわりに

近畿地方出土の陶棺については、その被葬者像として土師質陶棺については分布や埴輪製作技法との関係から、それを職掌とする土師氏やその末裔、それに関わる有力者が、須恵質陶棺についても同様に窯業地周辺の古墳から出土することが多いという分布の特徴から須恵器生産集団との関係が想定されてきた（丸山 1973、藤田 1994、宮岡 2012）。

和歌山県内における出土事例をみた場合、藤並地区遺跡では周辺に古墳時代末期から平安時代にかけての窯跡が数多く存在し、根来寺坊院跡でも出土地周辺に窯跡の存在が想定されるなど、両遺跡では窯跡や灰原に残されていた未製品が後世の削平によって原位置を遊離し、出土したものと考えられる。須恵質陶棺は、生産地から遠隔地へ移動することは少なく、生産地周辺で消費されることが通例であることから、将来的には両遺跡周辺において須恵質陶棺を埋葬する古墳が発見される可能性が想定される。

平井遺跡出土の陶棺は、和歌山県では初例となる土師質陶棺であり、出土地の近辺で埴輪窯が発見されたことにより埴輪生産との関連を傍証する事例となった。陶棺の特徴としては、蓋の格子状区画の段数が3段と判断されることから、時期的には6世紀後半段階のものと判断され（図8）、河内地域で出現した陶棺が岡山県や奈良県北部地域へ伝播するのとあまり大きな隔たりがない段階で、この地域へも伝播した可能性が想定される。また、一部に付されたとみられる波状の突帯は、近畿地方では河内・和泉地方の古式の土師質陶棺を特徴づけるものであり（図9）、平井遺跡出土の陶棺は河内・和泉地域の影響下により製作された可能性が指摘できる。

【参考引用文献】

- 丸山竜平 1973 「土師氏の基礎的研究－土師質陶棺の被葬者をめぐって－」『日本史論叢』第2輯 日本史論叢会
白石耕治・乾哲也編 1992 『和泉丘陵の古墳』和泉丘陵内遺跡調査会
藤田忠彦 1994 「土師質陶棺の粗考－畿内及びその周辺を中心に－」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
河内一浩 1995 「陶棺四方山話」『紀北考古学談話会会報』No.15 紀北考古学談話会
宮岡昌宣 2012 「陶棺からみる畿内と吉備」『考古学研究』59 - 1 考古学研究会
津山郷土博物館 2013 『土の棺に眠る～美作の陶棺』

【和歌山県内出土陶棺文献】

根来寺坊院跡：（財）和歌山県文化財センター 1997 『根来寺坊院跡－県道泉佐野線道路改良工事に伴う根来工区発掘調査報告書－』 藤並地区遺跡：（財）和歌山県文化財センター 1995 『藤並地区遺跡発掘調査報告書－一般国道42号湯浅御坊道路（Ⅰ）建設に伴う発掘調査－』、有田川町遺跡調査会 2008 『藤並地区遺跡－町道吉備インター連絡線改修工事に伴う発掘調査報告－』

【図4・8・9出典】

塚の前古墳：岡山県教育委員会 1981 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』44 芝12号墳：長岡京跡発掘調査研究所 1979 『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集 小枝2号墳：吉井町教育委員会 1990 『小枝2号墳』
歌姫横穴墓：奈良県 1959 『奈良県史跡名勝天然記念物調査会抄報』第12輯 奈良市敷島町内出土：藤田 1994 狐塚1号墳：奈良市教育委員会 1985 『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和59年度 平山古墳：井出町教育委員会 1987 『平山古墳発掘調査概報』 安福寺横穴墓群A地点：藤田 1994 和泉向代1号墳：和泉丘陵内遺跡調査会 1992 『和泉丘陵の古墳』・藤田 1994年 こうもり塚古墳：総社市史編纂委員会 1987 『総社市史 考古資料編』 伝玉手山東横穴墓群：和泉丘陵内遺跡調査会 1992 『和泉丘陵の古墳』 野々上埴輪窯跡：羽曳野市教育委員会 1981 『古市遺跡群』Ⅲ 切戸1・2号墳：羽曳野市教育委員会 1985 『古市遺跡群』Ⅵ

新発見の古墳、平井 1 号墳

上地 舞・田中 元浩 (和歌山県教育委員会)

平井 1 号墳は、平成 25 年 9 月に平井遺跡の北側において伐採作業中に発見された。和歌山県教育委員会では、古墳の現状把握のため墳丘の測量調査を行い、「平井 1 号墳」として新たな古墳に認定した。

この古墳は、丘陵斜面中腹に存在するわずかな平坦面上に位置し、墳頂からは岩橋千塚古墳群や和歌山城など和歌山市内が一望できる（写真 1）。北西には丘陵頂部へと続く緩やかな斜面が存在し、古墳はこの丘陵斜面の先端に存在する。周囲の分布調査を行ったが、周辺に墳丘状の高まり等は確認できなかった。

測量調査の結果、平井 1 号墳は前方部を南東に向けた墳長 22 m を測る前方後円墳であることが判明した（第 1 図、写真 2・3）。墳丘斜面は、部分的に傾斜がやや緩やかとなる箇所が認められるものの、後世の改変や盛土の流出により墳丘の残りは良くない。また、後円部上には、近年まで墓地として利用されていたため、墓石基部や大振りの礫が複数散乱する状態であったが、^{ふきいし}葺石と思われるものは見受けられなかった。また前方部前端から前方部南隅において扁平な板状の結晶片岩を採集しており、前方部に石室などの埋葬施設が存在した可能性も想定される。遺物は墳頂、墳丘南北斜面などを中心に、^{すえき えんとうはにわ けいしょうはに}須恵器、円筒埴輪、形象埴輪を多数採集することができ、墳丘上にこれらの埴輪が立て並べられていたものと考えられる。出土した埴輪は、須恵質及び土師質のものがああり、いずれも^{あながま}窖窯により焼成されたものであった（写真 4）。円筒埴輪は、外面の調整が判明するものでは、タテ方向のハケ調整によるものと、ヨコ方向のハケ調整によるものが存在する。前者は凡近畿的に認められる V 群



写真 1 和歌山市眺望



写真 2 墳丘 1



写真 3 墳丘 2

系と呼ばれる埴輪、後者は在地の伝統が強い「紀伊型」と呼称される「IV群系」の埴輪と考えられ、異なる技術で製作された埴輪が同一古墳内に共存する特徴をもつ。

形象埴輪は、石見型埴輪、馬形埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪が存在する。石見型埴輪は、盾部の特徴から少なくとも2個体以上確認されている。家形埴輪は軒飾部分が確認されている。蓋形埴輪は、笠部が確認されている他、底部から低位置に貼り付けられた突帯をもつ基部が出土しており、蓋形埴輪またはその他の形象埴輪基部の可能性が考えられる。

須恵器は、大甕、壺、無蓋高坏、坏蓋、坏身が出土しており、坏蓋、坏身の形から古墳時代後期前半（6世紀前半）のものと考えられる（写真5）。

以上のことから、古墳の時期については、古墳時代後期前半に位置づけることができる。平井1号墳が存在する紀の川下流域北岸には、古墳時代中期後半（5世紀後半）から後期前半（6世紀前半）に史跡大谷古墳・晒山古墳群が築かれ、古墳時代後期前半には、晒山10号墳（全長35m）が存在する。今回確認された平井1号墳は、この古墳に併存する時期に築かれた古墳であることが明らかとなった。平井1号墳の直近に位置する平井遺跡の発掘調査では埴輪窯も検出されており、古墳と埴輪窯の関係についても今後注目される。

また、対岸の岩橋千塚古墳群には、この時期、大日山35号墳（墳長86m）、大谷山22号墳（墳長80m）をはじめとした大型前方後円墳が次々と築かれ、古墳造営のピークを迎えるようになる。古墳の規模がその被葬者の権力を反映するものであるとすれば、北岸と南岸の勢力関係を明らかにするうえで、平井1号墳は示唆的な古墳であるといえる。

本稿は、「平井1号墳（仮称）現地確認報告書」和歌山県教育庁2013をもとに担当者が協議したうえで上地が執筆した。



写真4 埴輪



写真5 須恵器



- 62・64・65. 晒山古墳群
- 62-10. 晒山10号墳
- 63. 慶田寺裏山古墳
- 66. 雨が谷古墳群
- 69. 雨が谷6号墳
- 70. 楠見遺跡
- 399. 平井遺跡
- 437. 平井Ⅱ遺跡
- 439. 平井1号墳
- 指6. 大谷古墳

『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』(1/25,000)を一部加筆

第1図 平井1号墳墳丘測量図(S=1/200)

資料紹介

平井遺跡出土の埴輪たち

森原 聖 (公益財団法人和歌山県文化財センター)

平井遺跡の調査では、北側に連なる和泉山脈の山裾で埴輪窯2基が確認された。窯が築かれた東側山頂には平井1号墳も確認されており、いずれも6世紀前半の時期に相当すると考えられる。窯の南側は中世以降、田畑として利用されてきたと考えられ、大きく削平を受けているものの、東側に位置する窯は比較的残りの良い状態であった。また、中世以前にも窯の南側は広い範囲を大きく掘削されており、堆積土の状態から長い時間、水の影響を受けていたと考えられる。その堆積土に混ざって多くの埴輪片が出土しており、それらは埴輪窯で焼かれたものや、周辺に位置する古墳に並べられていた埴輪である可能性が考えられる。



埴輪窯出土の埴輪

円筒埴輪

古墳の周囲や墳頂、造り出しなどに並べられ、古墳を荘厳に飾ったり、柵や垣根のような区画の役割を果たしていたと考えられている。出土した円筒埴輪は褐色の土師質のものや、灰色の須恵質に固く焼き締まったり、焼き歪んだ(1)ものも出土しており、窯周辺の性格を物語っている。(2)の外面にはタタキによる調整がみられ、須恵器製作技術の伝播を窺うことができる資料である。



家形埴輪

建物はその屋根の構造により、入母屋造り、寄棟造り、切妻造りに分かれる。出土した埴輪は四面庇の入母屋造りの下屋根部(3)であり、分割して成形されている。屋根には刺突や線刻が施されているものもみられる。岩橋千塚古墳群に所在する大日山35号墳や大阪府高槻市の今城塚古墳では類似する家形埴輪が出土しており、上下に3分割の棟持ち柱をもつ建物である可能性も考えられる。(4)の文様は、湯浅町の天神山古墳で確認されている壺形の文様である可能性が考えられ、その他の遺跡で同様のものは確認されていない。

馬形埴輪



馬形埴輪は、大陸より乗馬の風習が伝来し、古墳に馬具が副葬されるようになる5世紀中葉から製作されるようになる。出土した埴輪は、馬の尻部分(5)や人を乗せるための鞍の一部(6)、尻や胸の装飾に使われる杏葉(7)がある。杏葉は轡に付ける鏡板とセットになるもので、共に円形(楕円形)であることから鏡板も円形(楕円形)のものがつくと考えられる。杏葉は2種類出土しており少なくとも2頭分あると考えられる。



人物埴輪



人物埴輪は性別の他、王や貴人、武人、巫女、力士など様々な地位やその役割が表現されている。その差はおもに髪型や服装、肉体的特徴に表されている。服装では、女性は袈裟状の衣に帯を結び、襷がけをする姿が長く普及しており、男性は甲冑を着用する武人や井辺八幡山古墳から出土した裸足でまわしをつけた力士などの表現がある。(8)は服の合わせ目が表現された男性の体部と考えられる。(9)は首から肩にかけての体部で、首にはシンプルな首飾りを模した朱色の円形の粘土を2連に張り付けている。

いわみがた
石見型埴輪



その系譜は琴柱形石製品や儀杖形木製品と考えられ、玉杖（指揮棒）の頭部の形に通じる。分布の中心は畿内にあり6世紀に入って盛行する。(10)は形象部の下段帯から下段面にあたると考えられ、線刻による直弧文が施されている。(11)の壺形と穿孔が組み合わされた文様は岩橋千塚古墳群に所在する花山2号墳で確認されており、その他岡山県、奈良県につぐ4例目と考えられる。



ころくがた
胡籥形埴輪

矢の表現をする埴輪は、矢羽根を上に向けた、腰に装着する道具である胡籥形埴輪と、矢尻を上に向けた、背中に背負う道具である鞞形埴輪の2種類がある。胡籥は騎馬用で短弓をいれるのが普通で、皮製・木製・蔓製などがあったようである。胡籥形埴輪は武人埴輪の付属品とされることが通例であるが、胡籥単体を明らかに表現した埴輪は、大日山35号墳をはじめとする岩橋千塚古墳群周辺から出土した数点に限られている。(12・13)はいずれも線刻により、矢羽根を表現しており、(13)は上端部にあたると考えられる。



12



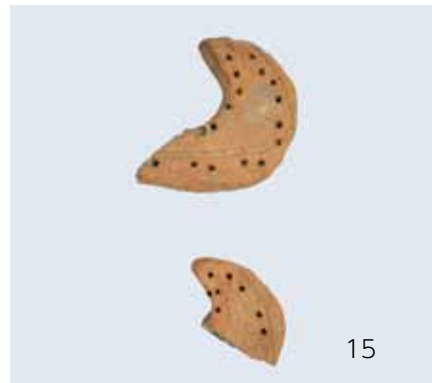
13

そうきやくりんじょうもん
双脚輪状文埴輪

その形状から貴人にさしかける「さしば」説、南方のスイジ貝説のほか、朝鮮半島に由来する蓮華形の冠帽説かんぼうがあった。岩橋千塚の大日山 35 号墳では双脚輪状文形かんぼうのものを冠帽としてかぶった人物埴輪が出土しており、冠帽を表現した埴輪であることが解明された。



14



15

平井遺跡から出土した埴輪は地域色が強く、個性的なものが多い。それらは、岩橋千塚古墳群に造られた 6 世紀前半の首長墓である大日山 35 号墳や井辺八幡山古墳などから出土した埴輪の組成と類似している。紀伊国名草郡に勢力を持っていた紀氏集団の勢力の中心地は、5 世紀に大谷古墳や車駕之古址古墳といった大型の前方後円墳が築造された紀ノ川北岸勢力きのおみから、6 世紀に入り大型の前方後円墳が築造された岩橋千塚古墳群のある紀ノ川南岸勢力きのあたえへ移動したと考えられている。調査によって出土した 6 世紀前半の多くの埴輪は、上記のような 2 つの集団間の勢力移動とは異なった印象を感じさせ、紀ノ川を挟んだ地域に 1 つの大きな勢力があることをうかがわせる成果となった。遺跡からは紀ノ川南岸で作られたと考えられる結晶片岩を含む埴輪も出土しており、埴輪の生産に係った工人の移動や埴輪自体の移動を検討するとともに、紀ノ川南岸勢力の影響力が北岸に及んだ可能性も考える必要があるだろう。

なお、文章作成にあたり、河内一浩氏および和歌山県文化財センター同僚の諸氏には有益な御教示をいただいた。ここに感謝の意を表します。

紀ノ川北岸の概要 - 平井津推定地の周辺 -

このシンポジウムは、和歌山県文化財センターで近年発掘調査を進めてきた楠見遺跡、平井遺跡、平井Ⅱ遺跡を中心に、紀ノ川北岸の古墳文化の新たな成果を紹介する場となることを目的としている。紀ノ川北岸は古墳時代中期の渡来文化の流入地として注目を集めた地であるが、今年度の発掘調査では初期須恵器のほかに、古墳時代後期の埴輪窯や陶棺が出土するとともに、調査地に隣接して6世紀前半の前方後円墳が見つかるなど、新たな展開をみせている。各発表者の原稿に詳しいが、ここで紀ノ川北岸の古墳時代の概要を簡単に紹介しておきたい。

紀ノ川下流域は、古墳時代中期の主要な渡来文化の窓口の一つとして、重要視されてきた地域である。和歌山平野に連なる湊は「紀水門」として認識することができるが、そのうち紀ノ川南岸に面する湊として著名なのが「徳勒津」、紀ノ川北岸地域に面する湊として、平安時代の文献に登場するのが「平井津」である。紀ノ川の流路はしばしば移動したようだが、古墳時代の紀ノ川北岸の主要な湊はやはり「平井津」であったと考えられる。

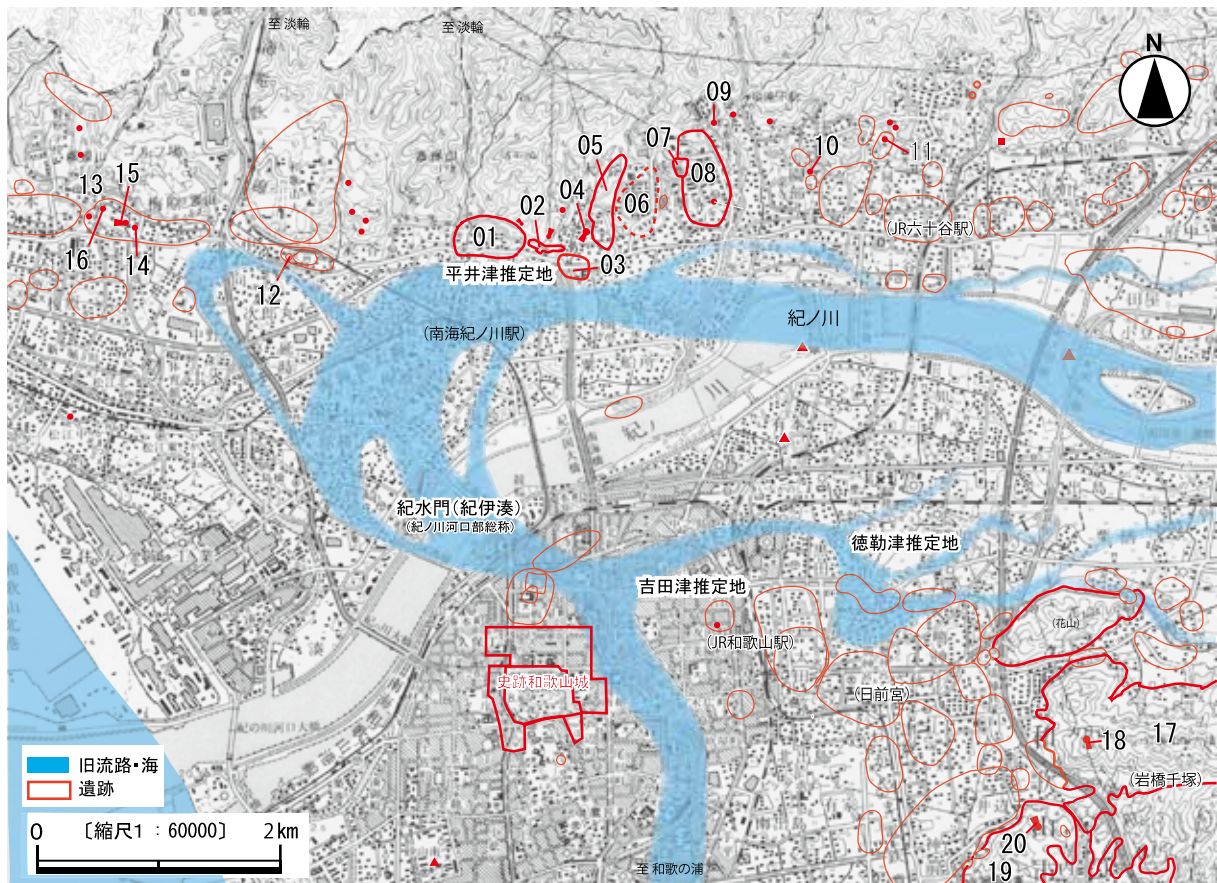
平井の津の周辺は、下層のボーリング調査で大きく旧流路が蛇行する状況がみられ、発掘調査が進む平井遺跡、平井Ⅱ遺跡・楠見遺跡の南側にあたるものと推定される。

まず、平井の津の一角を形成する可能性のある遺跡が楠見遺跡(03)である。楠見遺跡では昭和44年に楠見式土器と呼ばれる陶質土器ないし初期須恵器が多量に出土しており、土器の流通の中継地点があった可能性も考えられてきた。今年度、楠見遺跡に隣接する平井Ⅱ遺跡(02)で同様の土器が出土することが確認され、その分布範囲が若干西に広がった。初期須恵器が出土する時期に、晒山古墳群(05)の形成が始まり、晒山の東側の谷筋を遡った丘陵端部に鳴滝遺跡(07)の巨大な倉庫群が形成されている。同時期の倉庫を彷彿とさせる資料として、大同寺古墳(11)の家形廬が有名である。古墳時代中期の大型前方後円墳はこれらの地域より海寄りに位置しており、楠見遺跡から西へ約3.5kmの木ノ本古墳群(13)のほか、紀ノ川北岸から平井峠ないし孝子峠を越えて大阪湾岸側に出た地点にある淡輪古墳群は、楠見遺跡から北方7.5kmの地点に築かれている。当該時期に周辺で淡輪系埴輪が使用された古墳がみられる。

5世紀末になると、前方後円墳の規模はやや縮小し、晒山古墳群の南端部に大谷古墳(04)が築かれる。楠見遺跡から北に約250mの丘陵端部にあり、九州の阿蘇溶結凝灰岩製の組み合わせ式家形石棺や馬冑といったものが湊を通じてもたらされたことが分かる。

古墳時代後期には平井遺跡(01)で横穴式石室や埴輪窯が検出されたほか、陶棺が出土している。平井遺跡に隣接してやや小型の前方後円墳である平井1号墳が確認されている。晒山古墳群の東には雨が谷古墳群(06)・鳴滝古墳群(08)といった群集墳があり、周辺では横穴式石室をもつ奥出古墳(09)や園部丸山古墳(10)とともに、紀ノ川南岸で産出する緑色片岩を使用した横穴式石室を構築する鳴滝1号墳(08)のような古墳も見受けられる。

5世紀から6世紀にかけて、新規に発見された古墳や須恵器・埴輪・陶棺等の焼き物の存在は、この地にもたらされた渡来文化の内容とその後の展開を考える上で、重要な資料となるものと期待される。



推定される紀ノ川旧流路と遺跡の位置関係図

参考文献・図版出典

『紀ノ川の河口と海岸地形の変化』『和歌山市史』第1巻 日下雅義1991

「太田・黒田遺跡の地形環境」『和歌山市太田・黒田地域総合調査地理・歴史調査概報』和歌山市教育委員会 日下雅義1969

「和歌の浦学術調査報告」和歌山県教育委員会2010 を参照のうえ参考図として旧流路を暫定的に復元

番号	遺跡名	概	要
01	平井遺跡	2013年度調査で、古墳時代後期の古墳2基、埴輪窯2基を確認。陶棺が出土	
02	平井Ⅱ遺跡	2012年度調査で、多数の初期須恵器（楠見式）が出土	
03	楠見遺跡	5世紀前半。楠見小学校の校庭から、多量の初期須恵器（楠見式）が出土	
04	大谷古墳	5世紀後葉。増長約70mの前方後円墳。阿蘇産の凝灰岩を用いた組合せ式家形石棺を使用。大陸文化との交流を窺わせる馬冑・馬甲など、多数の副葬品が出土	
05	晒山古墳群	5世紀前半から6世紀後半。2基の前方後円墳を含む12基で構成	
06	雨が谷古墳群	6世紀前半。1基の方墳を含む6基で構成	
07	鳴滝遺跡	5世紀前半。倉庫群とされる7棟の大型掘立柱建物群が検出された。初期須恵器（楠見式）の大甕が多量に出土	
08	鳴滝古墳群	5世紀末～7世紀頃。11基の円墳で構成。1号墳は緑色片岩の岩橋型横穴式石室	
09	奥出古墳	6世紀。径約25mの円墳で、内部主体は和泉砂岩の横穴式石室	
10	園部丸山古墳	6世紀後半。径約25mの円墳。和泉砂岩の巨石等を用いた大型の横穴式石室	
11	大同寺古墳	大正12年に陶質土器とみられる家形等5点が出土、古墳と推定される。	
12	貴志古墳	消滅。6世紀中頃～後半の土器があり、竪穴式石室があったと伝えられる。	
13	木ノ本古墳群	釜山古墳・車駕之古址古墳・茶臼山古墳の3基で構成される。淡輪系埴輪が出土する。	
14	釜山古墳	5世紀中頃。径約50mの円墳。純金断片、ガラス小玉等が出土。	
15	車駕之古址古墳	5世紀中頃。墳長86mの前方後円墳で、周濠・堤の総長約120m。金製勾玉が出土。	
16	茶臼山古墳	5世紀中頃。墳長約50mの帆立貝形古墳。	
17	岩橋千塚古墳群	4世紀末～7世紀。紀直・紀国造家の古墳群とみられ、中心部は特別史跡指定。周囲の古墳群を含んだ岩橋山塊全域では、総数約850基が確認されている。	
18	大日山35号墳	6世紀前半。墳長86mの前方後円墳で、独特な形象埴輪が多数出土	
19	井辺前山古墳群	5～6世紀。推定地点含む88基から成る大型の古墳群。前方後円墳6基を含む	
20	井辺八幡山古墳	6世紀前半。墳長67mの前方後円墳で、造出しから多量の埴輪が出土	
21	寺内古墳群	6世紀後葉～7世紀中心。大型円墳を多数含む、88基で構成。消滅古墳多数	
22	花山古墳群	5世紀中心。前方後円墳9基を含む、84基で構成される。	

公開シンポジウム

紀ノ川北岸の古墳文化 資料集

－ 初期須恵器・埴輪・陶棺からみた地域の歴史－

発行日：平成 26 (2014) 年 2 月 1 日

発 行：公益財団法人和歌山県文化財センター
〒 640-8404

和歌山市湊 571-1

TEL：073-433-3843

FAX：073-425-4595

Email：maizou-1@wabunse.or.jp

URL <http://www.wabunse.or.jp>

印 刷：白光印刷株式会社



平井遺跡・平井Ⅱ遺跡調査風景

講演 **「紀伊の渡来文化—初期須恵器を中心に—」**

定森 秀夫 (滋賀県立大学 教授)

「平井遺跡周辺の調査成果」

中村 淳磯 (公益財団法人 和歌山県文化財センター)

「紀ノ川北岸の埴輪—淡輪系埴輪を中心に—」

藤藪 勝則 (公益財団法人 和歌山市文化スポーツ振興財団)

「和歌山県出土の陶棺」

川口 修実 (有田川町教育委員会)

討論 **「紀ノ川北岸の古墳文化について」**

